



fig. 122 ⅢトレンチSK 21
遺物出土状況（西から）

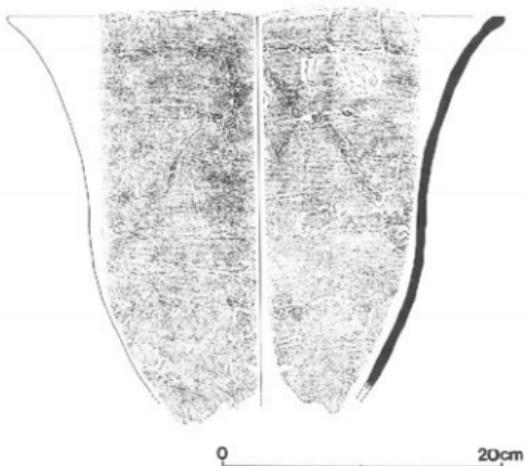


fig. 123 ⅢトレンチSK 21出土繩文土器

S D21 幅約60cm、深さ約15cmの溝状遺構で、縄文時代後期の土器片とサヌカイトの剥片が確認された。

S D22 幅約140cm、深さ約15cmの溝状遺構で、S D21と同様に縄文時代後期の土器片とサヌカイトの剥片が確認された。

S D24 幅約120cm、深さ約10cmの溝状遺構で、縄文時代のものと考えられる土器片とサヌカイトの剥片が確認された。

Ⅲトレンチ 耕土、床土の下層が砂礫と細砂の互層となっており、明石川の氾濫原であると考えられる。各層において、遺構は確認されなかった。

互層部分の上層より近世遺物、中層より中世遺物がそれぞれ確認された。

Ⅳトレンチ 2面の遺構面が確認された。

層序は上層より耕土、床土、茶灰色粘砂土、灰色粘質土、灰黄色粘質土、黒灰色粘質土、濃灰色シルト、青灰色細砂の順で、北半部では灰黄色粘質土と濃灰色シルトとの間に黒灰色粘質土ではなく、濃茶灰色粘砂土が存在し、南端部では灰色粘質土と黒灰色粘質土との間に灰黄色粘質土ではなく、暗茶灰色粘砂土が存在する。

灰色粘質土は中世、灰黄色粘質土は古墳時代中～後期、濃灰色シルトは弥生時代中期の遺物をそれぞれ包含する層である。

第1遺構面 灰黄色粘質土・濃茶灰色粘砂土を除去した時点で検出された遺構面で、溝状遺構（S D01）を1条検出したのみである。

溝状遺構（S D01）内から古墳時代のものと考えられる土師器片が確認された程度で、明確な時期については不明である。

第2遺構面

濃灰色シルトを除去した時点で検出された遺構面で、溝状遺構2条（S D11・12）と不定形落ち込み状遺構（S X11）を検出した。S D11より弥生土器と思われる細片が確認された程度で、詳細な時期については不明である。

Vトレンチ

このトレンチの土層堆積状況は低湿地の様相を呈し、遺構面としてとらえることのできる層は存在しなかった。

層序は上層より耕土、床土、茶灰色粘質土、灰色粘質土、濃灰色粘質土、青灰色シルトの順で、西端部では茶灰色粘質土、灰色粘質土、濃灰色粘質土が存在しない。

濃灰色粘質土より土師器小皿、青灰色シルトより須恵器片がそれぞれ確認された程度で、各層位の明確な時期については不明である。

VIIトレンチ

Vトレンチと同様に低湿地の様相を呈し、遺構面としてとらえることのできる層は存在しなかった。



fig. 124 VIIトレンチ第2遺構面全景（南西から）

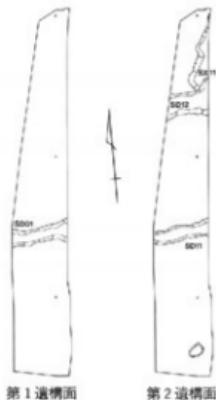


fig. 125 VIIトレンチ平面図

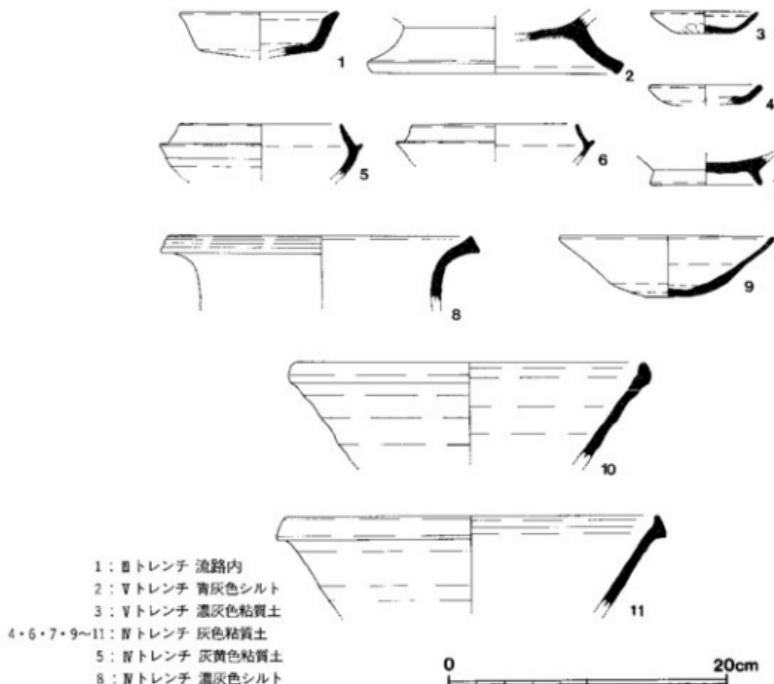


fig.126 Ⅲ～Ⅷトレンチ出土土器

層序は上層より耕土、床土、灰色細礫混り粘質土、暗灰色細礫混り砂質土、暗灰色シルト、暗灰色礫混りシルト、暗茶灰色シルトの順で、北半部では暗灰色シルトと暗茶灰色シルトとの間に暗灰色礫混りシルトではなく、黒灰色シルトが存在する。

暗灰色細礫混り砂質土、暗灰色シルトより土師器と須恵器の細片が確認された程度で、各層の明確な時期については不明である。

Ⅸトレンチ

北半部では床土下の灰色系の礫混り砂質土を除去した時点で、基盤層と考えられる茶褐色系の細礫混り砂質土が検出され、南半部では灰色系の礫混り砂質土と基盤層との間に整地層と考えられる濃茶褐色砂質土が存在する。濃茶褐色砂質土中からは古墳時代～平安時代にかけての遺物が検出された。

南端部は極端に下がっており、その高低差は約2.8mである。

遺構は基盤層面で検出され、南部について工事の影響深度に応じて、濃茶褐色砂質土の上層を掘削したのみで、基盤層面の遺構の確認作業はできなかった。

基盤層面において検出された遺構は、掘立柱建物址（S B01・02）、竪穴住居址（S B03）、ピット（S P01他）、溝などで、掘立柱建物址及び竪穴住居址の規模は下記の通りである。

- S B01 4間以上×2間以上（約7m以上×約2m以上）
- S B02 規模不明確
- S B03 一辺約2.7m

S B01・S B02については柱穴内より遺物を確認しえなかたため時期は不明であるが、S B03においては古墳時代中期頃の遺物が確認された。

その他、S P01より詳細な時期は不明であるが、土師器の高壺が検出されている。

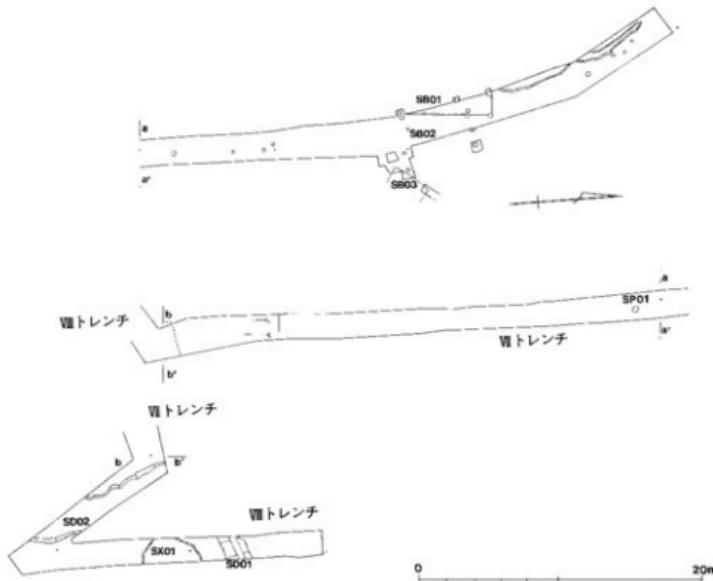


fig.127 VII・VIIIトレンチ平面図

VIIトレンチ

VIIトレンチの南端部から南西方向に延びるトレンチである。

層序は上層より耕土、床土、灰色砂質土、黄灰色砂質土、茶灰色砂質土の順で、茶灰色砂質土中より中世の遺物が確認され、その下層面が遺構面となっている。

VIIトレンチに連続する部分では層序が異なり、山裾部分ということもあって、灰色砂質土の下では基盤層と考えられる黄茶色砂質土が存在する。

検出した遺構面の下層については工事の影響深度を越えるために、若干の確認を行ったに過ぎず、状況は不明瞭であるが、確認調査の結果によると、V・VIトレンチと同様に低湿地のような様相を呈しており、遺構面の有無については不明であるが、土師器・須恵器片などの遺物が出土している。

遺構は溝状遺構2条（S D01・02）と不定形落ち込み状遺構（S X01）が確認されており、S D02より中世の遺物を検出した。また、その他の遺構からも土師器・須恵器片を検出しているが、時期は不明である。

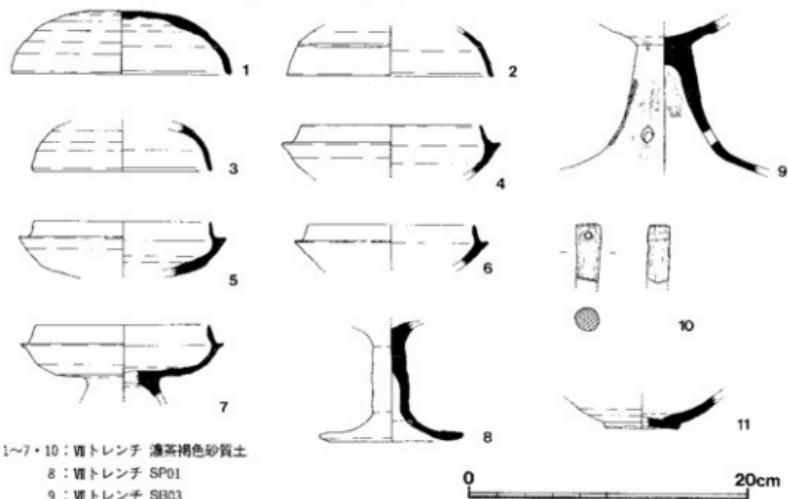


fig.128 VII・VIIトレンチ出土土器・土鏡

Ⅳトレンチの南側に延びるトレンチで、2面の遺構面が検出された。

層序はIVトレンチの南端部とほぼ同じであるが、トレンチの半ばあたりでは暗茶灰色粘砂土と濃灰色粘質土との間に暗茶灰色シルト・暗灰色シルトが存在する。

第1遺構面 中世包含層と考えられる灰色粘質土を除去した時点で検出された遺構面で、IVトレンチには存在しない面である。

土坑状遺構（SK31）、溝状遺構（SD31）、不定形落ち込み状遺構（SX31）などの遺構を確認しているが、いずれも遺物の検出はなく、時期は不明である。

第2遺構面 弥生時代中期の遺物を包含する層である濃灰色シルトを除去した時点で検出された遺構面で、IVトレンチの第2遺構面にあたる面である。溝状遺構、不定形落ち込み状遺構などを確認しているが、いずれも遺物の検出はなく、時期は不明である。また、トレンチの南端部は自然流路状の落ち込みになっており、工事の影響深度の関係上、層序等の若干の確認を行うに止めたため、流路内での遺物等の検出はなかった。

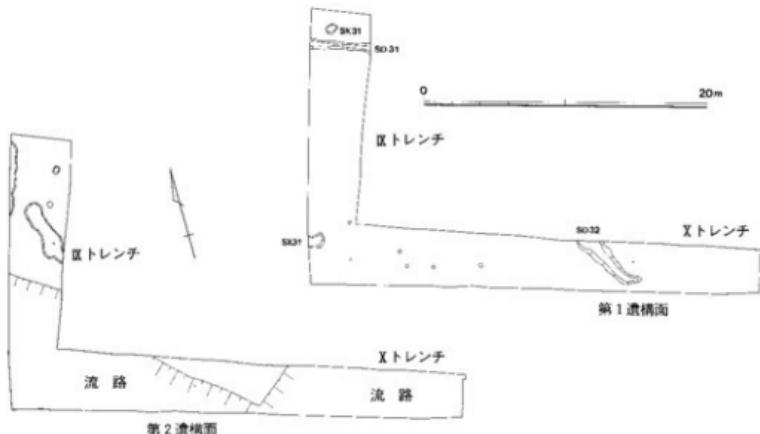


fig. 129 IX・Xトレンチ平面図

Xトレンチ IXトレンチの南端部より東方向に延びるトレンチで、2面の遺構面が検出された。

層序はIXトレンチに存在した暗茶灰色シルトがなく、同じ層位に茶褐色シルトが存在する他は基本的にIV・IXトレンチと変わりはない。

第1遺構面 中世包含層と考えられる灰色粘質土を除去した時点で検出された遺構面で、IXトレンチの第1遺構面に連続する面である。

検出した遺構は溝状遺構（SD32）、ピット状遺構などで、SD32より古墳時代後期の遺物が確認されている。また、東端部はシルト、細砾、粗砂などが互層となる落ち込みとなっており、明石川の氾濫原の縁辺部である可能性も考えられる。

第2遺構面 IXトレンチの第2遺構面に連続する面で、IXトレンチの南端部で確認された自然流路状の落ち込みの範囲内にあたり、一部でこの流路の肩部と考えられる箇所を確認した程度である。

この面もIXトレンチと同様に、工事の影響深度の関係上、層序等の若干の確認を行うに止めたため、流路内での遺物等の検出はなかった。

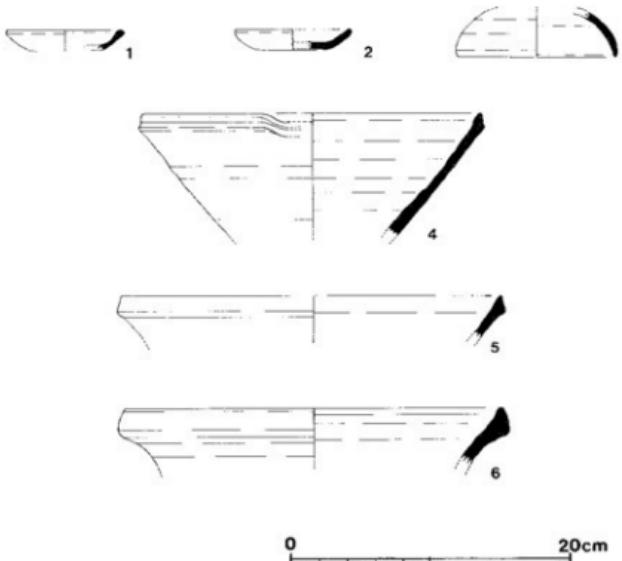


fig.130 X・XIトレンチ出土土器 1・2・6：Xトレンチ灰色粘質土 3：XトレンチSD32
4・5：Xトレンチ灰色粘質土

3. まとめ

試掘調査を含めた今回の調査では、まず、旧地形の状況として、調査対象地である印路地区南半部の大部分が氾濫原・後背湿地で、現在の印路集落の立地する地域周辺が微高地となっており、また、現集落南側の低地の中央部に中洲状の微高地が存在することが明らかになった。そして、主に微高地と西側丘陵の山裾・段丘部周辺において、遺構等を確認することができた。

時期的には、縄文時代～中世の遺構、旧石器時代～近世の遺物を確認することができ、当該地における各時代の遺構の状況をある程度把握することができた。

以下、今回の調査成果を時代ごとにまとめておく。

旧石器時代

同時代に属する遺物が後世の遺物包含層中より検出されているが、遺構は確認されていない。

縄文時代

後期に属する遺構・遺物が低地中央部の微高地より検出され、当地域における縄文時代後期の遺跡の存在を確認することができた。

弥生時代

印路地区の現集落南縁の微高地より、中期の遺物が検出されている他、低地中央部の微高地においても後期頃に属すると考えられる水田址が確認されているが、詳細な時期は判然としない。また、試掘調査において、低地中央部の微高地南側の氾濫原中より、前期末に属する土器片を確認しているが、本調査では、同時期の遺構・遺物の検出はなかった。

古墳時代

低地中央部の微高地において、前～中期の遺物が大量に包含された溝が検出され、当微高地における同時期の集落の存在が明らかになった。また、中期頃に属すると考えられる韓式系土器が数点確認されており、同時期における朝鮮半島との交流をうかがうことができる。その他、現集落南縁の微高地、西側段丘部においても、後期の遺構・遺物が検出され、当地域における同時期の集落の存在を肯定するものといえよう。

奈良時代

試掘調査において、西側段丘東縁部より、同時期に属する遺物を確認しているが、本調査においては、土器の細片を確認した程度である。

中・近世

同時期においては、低地部が水田等の耕作地に利用されていた可能性が強く、集落の中核部は現集落の立地する微高地か西側段丘部に存在したと考えられる。

9. 出合^{であい}遺跡

1. はじめに

出合遺跡は日本住宅公団（当時）が、「出合・ふれあいの街」の造成を玉津町出合に計画し、それに伴って昭和52年～同59年にかけて行われた発掘調査により、その内容が具体的に知られるようになったものである。発掘調査は瀬戸内考古学研究所が主体となって行われた。その結果、6世紀初頭の亀塚と方墳1基、円墳3基、古墳時代中期～後期の竪穴住居址、溝とそれらから出土した韓式系土器、初期須恵器、奈良時代の掘立柱建物址4棟と、8世紀～10世紀まで使われた井戸及び井戸から出土した木簡・斎串・墨書き土器・転用硯・製塩土器・瓦・綠釉陶器、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物址のほか、平安時代の窯址などが発掘されている。

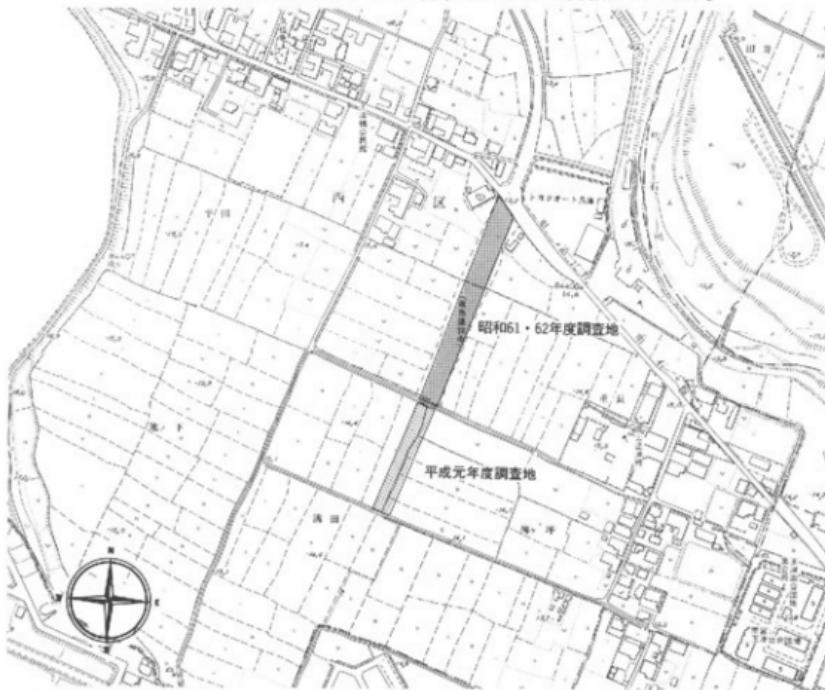


fig.131 調査地位置図 S = 1 : 5000

昭和61年2月12日～同21日まで行った道路予定地の試掘調査では、北半部で鎌倉時代と弥生時代～古墳時代前期の遺構面が検出された。南半部では、その土層より水田地帯と推定されたが、畦畔などは確認されなかった。

昭和61年11月～同62年3月19日に行った北半部の調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の溝・ピットと土器群、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物址、土坑、溝、鎌倉時代以降の土坑、溝、ピットなどが検出された。

昭和62年5月26日～同9月1日の調査では、前記調査地の下層部分を調査し、弥生時代中期後半の河道、弥生時代後期の周溝、掘立柱建物址などを検出した。

昭和62年10月5日～同11月6日の調査は、前調査区と、県道野村～明石間に残っていた部分の調査で、弥生時代後期の溝、ピットなどが検出された。

平成元年1月23日～同3月31日の調査では、中世以降の土坑と、中世以前の水田遺構が検出された。

2. 調査の概要

4月3日から引き続き行った調査は、先年度調査範囲（北地区）で検出した水田面直下に存在した柱穴群と、北地区北端部（約181m²）を残土置場としていた部分および、北地区の南側に広がる明石～国包線予定地の幅14.5m、長さ約36mの範囲（南地区）について実施した。

水田遺構

残土置場部分では、中世の遺構はなく、その下層に水田遺構が検出された。水田遺構の直下の面には、北地区の他の範囲及び、南地区で検出された柱穴群は存在しなかった。

南地区では表土下約70cmで中世以降の土坑4基と溝2条、表土下約1.2mで水田面と水路、及びこれを切る自然流路、そして水田直下に柱穴群を検出した。南地区で検出した土坑は、北地区で検出したものとほぼ形状がおなじで、直径1～1.8mの平面円形を呈する。坑壁上端付近には竹の様なものが、はりついていた。これらの検出面は、第7層上面（南地区基本土層図）である。

北地区北端部と南地区で検出

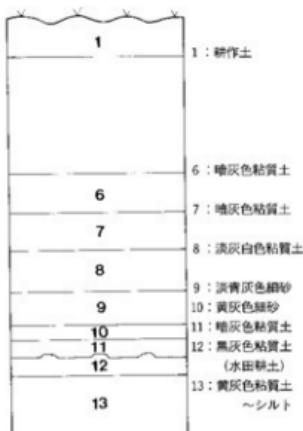


fig.132 南地区基本土層模式図 S=1:20

した水田遺構は、先年度に調査した水田と同じく、畔で囲まれた1区画の水田が完全に検出されたものはない。南地区では、水田とこれに伴う水路（S D01、02、03）が調査地西半を南北方向に流れていたが、その中央より南は自然流路によって大きく破壊を被っていた。

また、S D02北端の西岸部で、木組遺構を検出した。これはS D02がこの付近で大きくカーブすることから、護岸の目的をもったものと考えられる。

水田の時期は、遺物が少なく明確ではないが、北地区の水田面直下遺構を検出中に出土した土器片及び、南地区で水田に伴う水路（S D01～03）とこれを破壊している自然流路中から出土した土器片は、合計しても数点であるが、弥生時代中期に限定され、これ以降のものを含まない。

柱穴群

北地区および南地区的水田面直下からは、多数の柱穴群が検出された。北地区では主に東半部で、南地区では水路との関係から西半部において検出された。その分布は、北地区北端部から南地区南端部におよぶが、それには疎密がある。北地区では南端から約30mまでの間に多く集中しており、

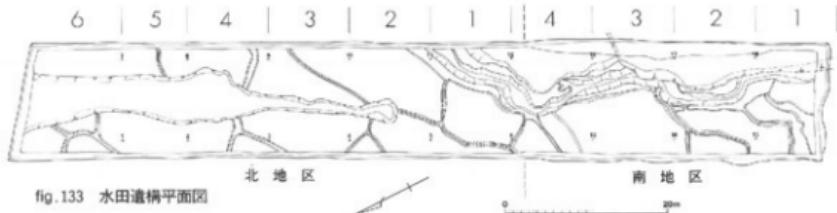


fig. 133 水田遺構平面図



fig. 134 柱穴群南地区水田遺構 (北から)



fig. 135 北地区柱穴群 (南から)

南地区では北端から約10mは密度は薄く、それ以南に集中箇所がある。これらの柱穴から出土した遺物は北地区東側のトレンチ壁下の排水溝を掘削中に検出したピット内から出土した弥生時代中期土器片のみである。

この土器を出土したピットとほかの多くの柱穴の埋土は、質、色調ともに共通しており、ほぼ同時期としても大過ないものと思われる。

3.まとめ

今回の調査では、中世以降の土坑と、弥生時代中期と推定される水田および柱穴群が検出された。弥生時代中期の水田に対応する居住区は、これまでの調査でも確認されていないが、周辺に存在することは十分考えられる。昭和61年度の調査では、弥生時代後期の土器片が多量に出土しており、これに対応する水田址もまた周囲に存在することが考えられる。水田直下で検出された遺構面には柱穴群のみが検出され、竪穴住居址はなかった。これらは竪穴住居址が削平され、その柱穴のみが残存した可能性もなくはないが、すべてをそのように考えることはできないであろう。

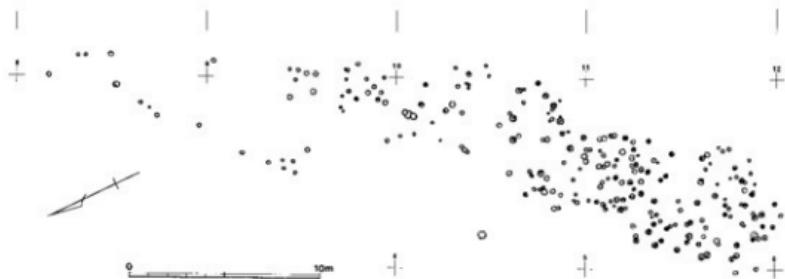


fig.136 北地区柱穴群平面図

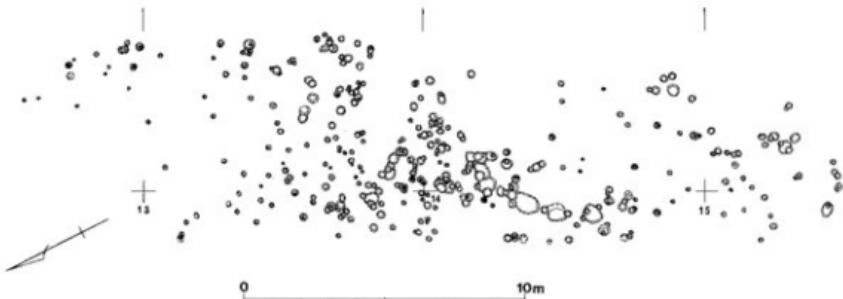


fig.137 南地区柱穴群平面図

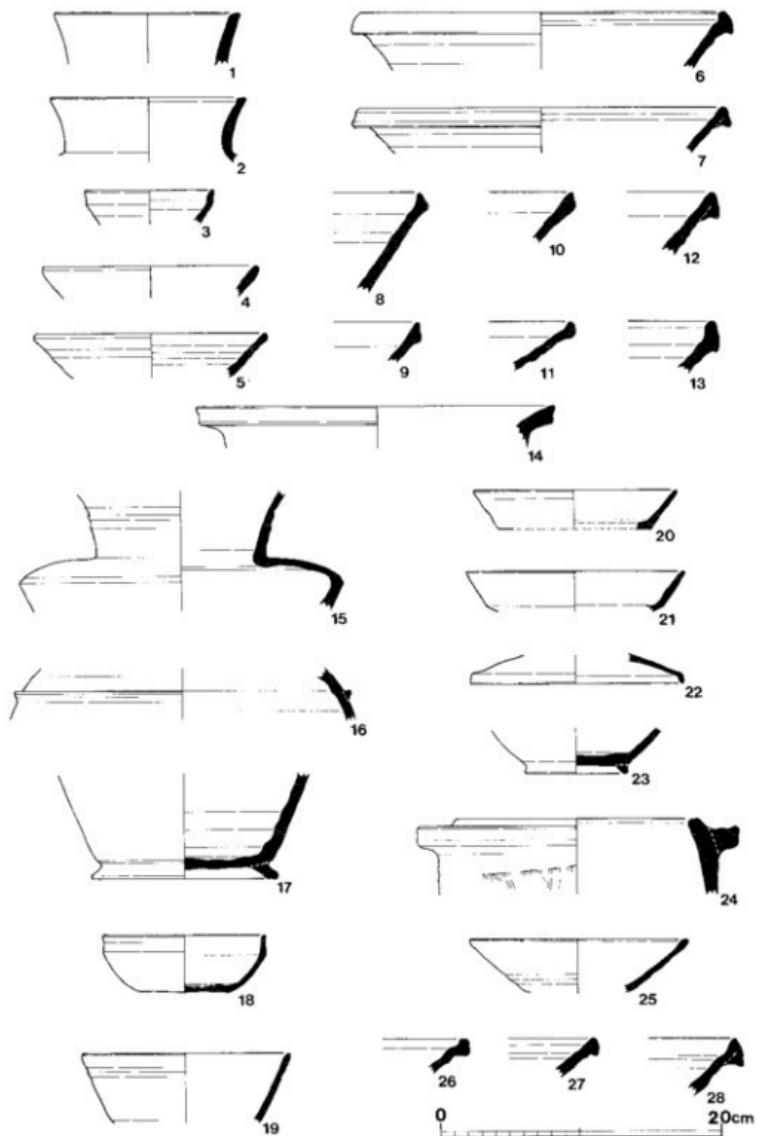


fig.138 出合遺跡出土土器

1~14: 第6層出土 15~28: 第7層出土 15: 灰釉陶器 24: 土篩器 他: 須恵器

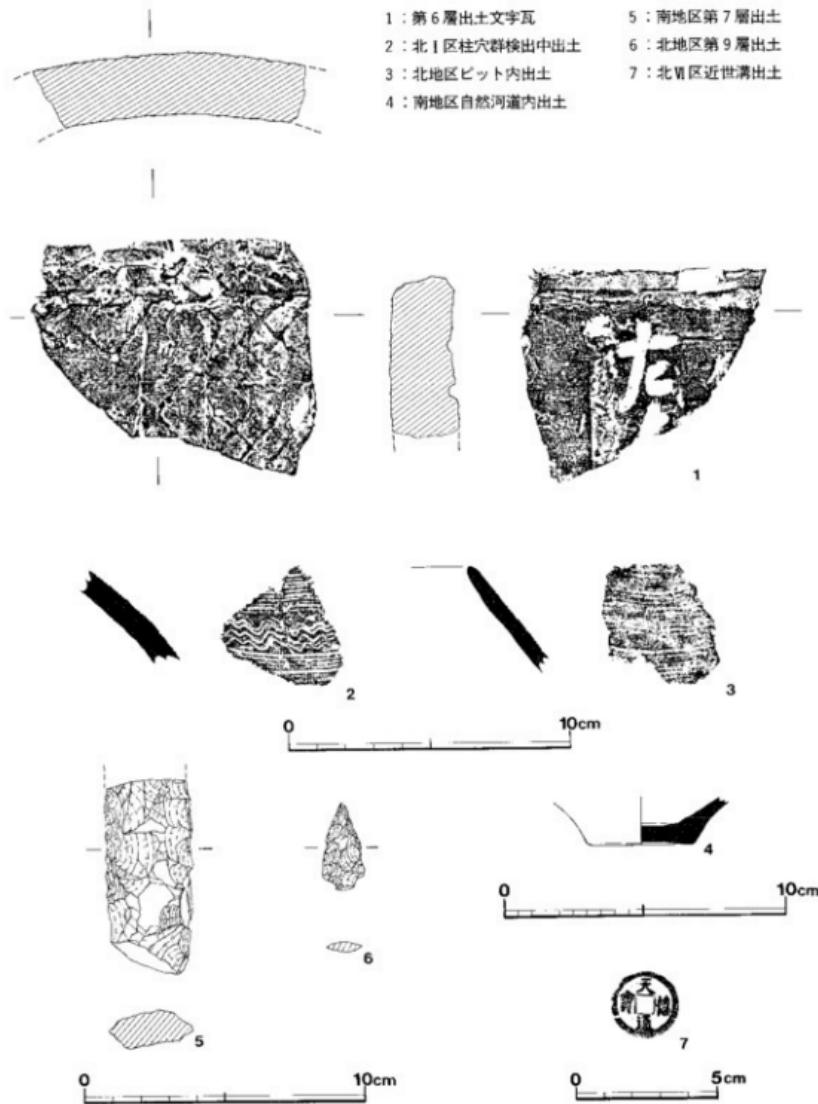


fig. 139 出合遺跡出土遺物

10. 西神せいしんニュータウン内遺跡

西神No.65地点遺跡

1. はじめに

昭和49年度における試掘調査（第1次調査－西神ニュータウン発掘調査団）によって尾根上に弥生時代の竪穴住居址1棟、焼土坑などを検出し、弥生時代の集落が存在していることを確認した。この調査の結果をもとに、保存区域が決定された。昭和58年度には保存区域以外にトレンチを設定し、試掘調査（第2次調査）を実施した。その結果A～F地区の全域に弥生時代の遺構・遺物が存在していることを確認した。昭和59年度には、西神7号線及び補助幹線の開発にかかるA・B・C・E地区に対して発掘調査（第3次調査）を実施し、弥生時代の竪穴住居址6棟をはじめとして、多数の遺物を検出した。昭和61年度には、関西電力の変電所の建設に伴い、B地区の西側斜面について発掘調査（第4次調査）を実施し、通路状遺構や土器棺などを検出した。平成元年度は、樫野台の宅地造成予定地に相当するA地区の発掘調査を行った（第5次調査）。

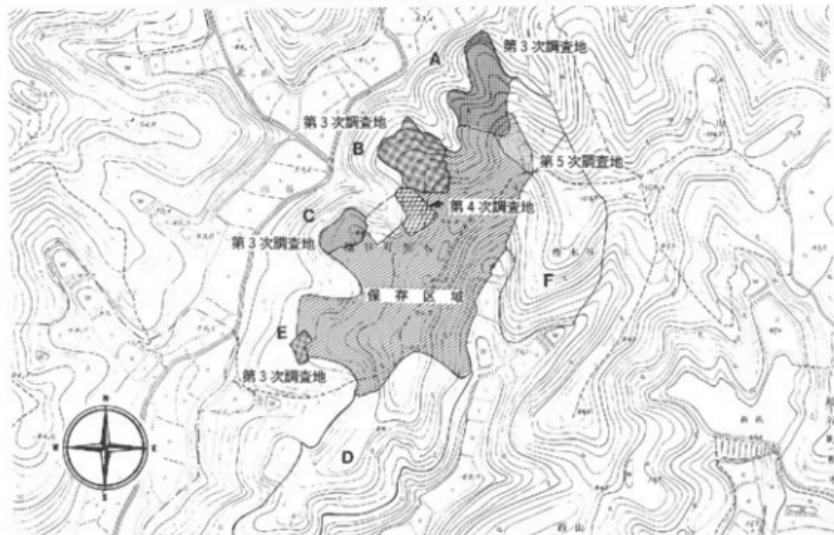


fig. 140 調査位置図 S = 1 : 5000

遺跡は標高106mを最高所とする丘陵上に立地し、標高約80mより高所に集落址が広がっている。櫛谷川流域に存在しているものの、川との間にはもう一つ丘陵が南北に延びていているために、近接する東側流域部は、望むことができない。これに対し、南側の櫛谷川流域と明石平野が接する二ツ屋・菅野付近や、さらに明石川の河口付近約1.5kmの海岸線は、丘陵頂部から望むことができる。眺望範囲のなかに明石川本流と櫛谷川・伊川の分岐点が含まれている。同時期の丘陵上の集落址であるNo50～52地点遺跡・青谷遺跡に対する眺望は極めて良好である。

2. 調査の概要

今回の調査地は、No65地点第3次調査のA地区の南側に隣接して位置し、標高約100mを最高所とする丘陵頂部である。北側は勾配率45%ほどの斜面で、東側は崖になっている。調査区の中央部分は丘陵頂部にあたり、緩やかな傾斜で尾根の頂部が西に延びている。

これまでの調査成果から、B地区とA地区の間の丘陵斜面及び尾根上には堅穴住居址等が存在している可能性があり、今回の調査でも堅穴住居址や地山整形構造等の検出が予想された。



fig.141
調査地周辺
航空写真



fig.142
調査地全景
(南から)

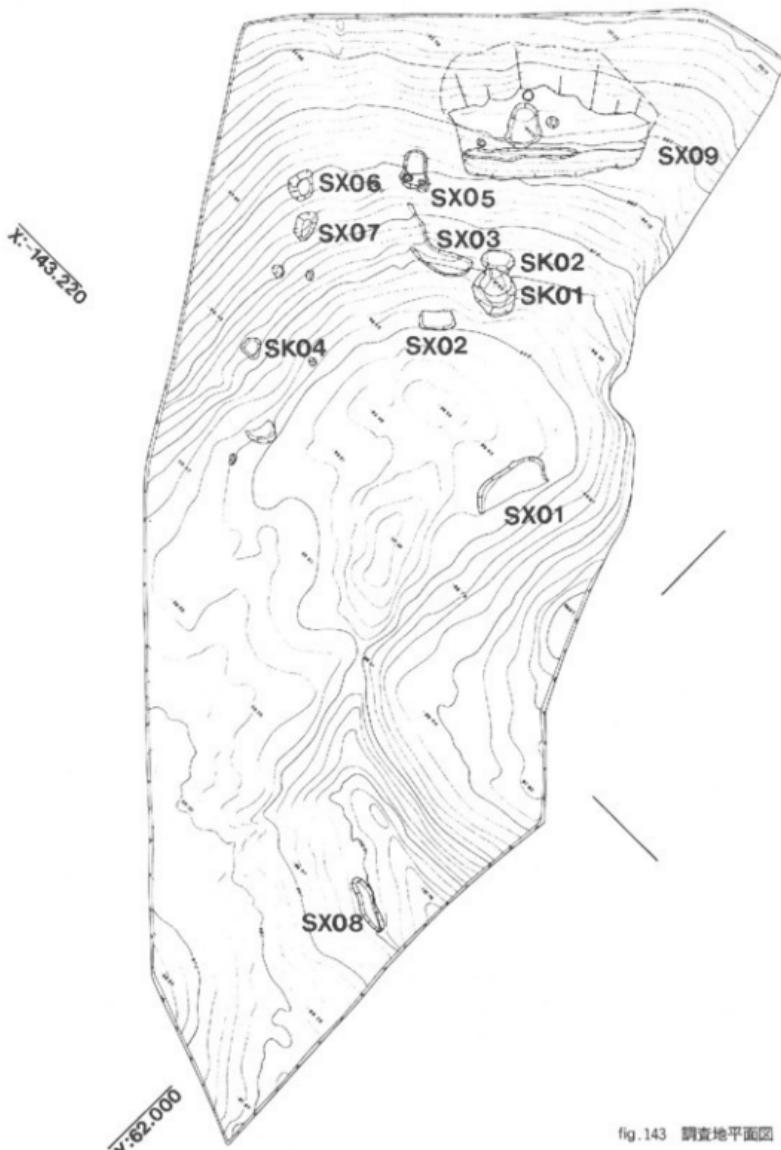


fig. 143 調査地平面図

今回の調査において、地山整形遺構2ヵ所・土坑2基・焼土坑1基・不明遺構7基・その他ピット5ヵ所などを検出した。

- S K01 調査区の中央よりやや北側の斜面で検出された長径2.0m、短径1.4m、深さ0.4mの楕円形の土坑である。
- S K02 調査区の中央よりやや北側の斜面で検出されたS K01の北側に位置し、直径1.5m、深さ0.2mの円形の土坑である。S K01とS K02は切り合い関係があり、S K01はS K02を切っている。なお本遺構から土器が出土しているが、細片のため時期は不明である。
- S K03 調査区の中央より西で検出された1辺0.8m、深さ0.1m程の平面形が隅円方形の焼土坑である。床面は薄く焼けており、炭が堆積していた。出土遺物はなく、時期は不明である。
- S X01 調査区の中央よりやや東側の平坦面で検出された長さ2.7m、幅1.0m、平坦面幅0.7mの平面形が半月形の地山整形遺構である。
- S X02 調査区の中央よりやや北側の斜面で検出したS K01の西に位置し、長さ1.0m、幅0.7m、平坦面幅0.5mの平面形が半月形である。
- S X03 調査区の中央よりやや北側の斜面で、S K02の西に隣接して検出された、幅0.8m、深さ0.1mの東西に走る溝状遺構である。
- S X04 調査区の中央よりやや西側の平坦面で検出したS K03の南東に位置し、長さ1.0m、幅0.7m、平坦面幅0.4mの平面形が半月形のものである。壁面が薄く焼けており、埋土中に炭が混在していた。出土遺物はなく、時期は不明である。
- S X05 調査区の北側の斜面で検出したS X03の北側に位置し、長径1.5m、短径0.8mの平面形が楕円形の遺構である。
- S X06 調査区の北側の斜面で検出したS X03の西側に位置し、長径1.1m、短

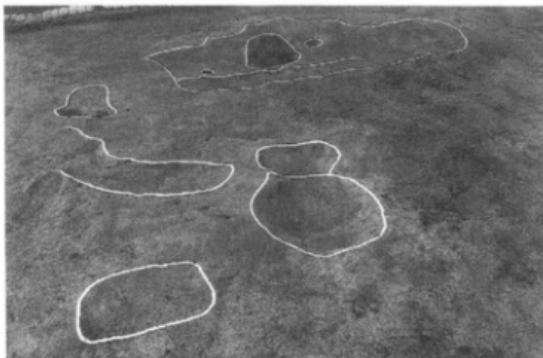


fig.144

調査区北斜面全景
(南から)

径0.7mの平面形が椭円形の遺構である。

S X 07 調査区の北側の斜面で検出したS X 03の西側に位置し、長径1.2m、短径0.9mの平面形が椭円形の遺構である。

S X 08 調査区の中央より南東の尾根上で検出した長径2.1m、短径0.6mの平面形が椭円形の遺構である。

なお、S X 01～08から遺物は出土していない。

地山整形遺構 調査地の北端の斜面で検出した。平面形が椭円形で、残存規模は、長軸

S X 09 8.9m・短軸4.0m、平坦面幅2.7mである。幅約0.2m・深さ0.05mの溝が北から西側に巡っている。地山を削り出した上に、0.1m～0.6mの盛土を

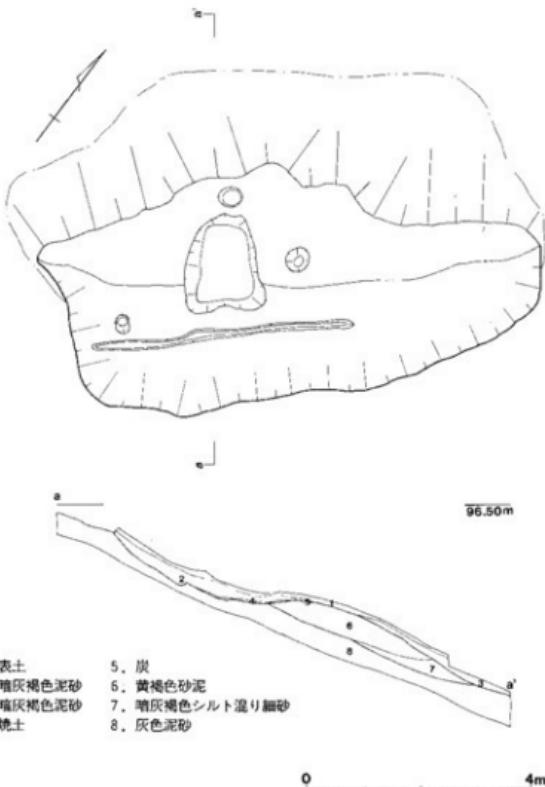


fig. 145 地山整形遺構平面・断面図

前面に行っている。遺構の中央部分で、約1.6m×1.4mの焼土坑と柱穴1基を検出したが、他は認められなかった。本遺構はNo65地点第3次調査で検出されたS B05のように張り出しを持つ竪穴住居址との類似が指摘されるところであり、それに基づくならば、直径8mほどの竪穴住居に東側へ2mほどの張り出しが付いているものとの可能性も考えられる。しかし3次調査のS X05などに比べ、溝やピットの位置等を考慮するとS X09を竪穴住居とする積極的根拠に乏しく、現時点では地山整形遺構としたい。

なおS X09内及び、盛土内からは土器が出土しなかった。

3.まとめ

今回の調査において、地山整形遺構1カ所・土坑2基・焼土坑1基等を検出した。しかしあ出土遺物に乏しく、各遺構の詳しい時期を決定するには至っていない。

No65地点は保存区域及び、B・C・D・E・Fの各地区において竪穴住居址が確認されており、これまでの調査でも12棟の住居址を確認している。

しかし、昭和59年度の調査では、A地区では焼土坑1基・湧水土坑1基を検出しているものの、竪穴住居址を確認しておらず、今回の調査で発見されたS X09が竪穴住居址の可能性をもつが、A地区には竪穴住居址は築かれていなかったものと思われる。焼土坑や湧水土坑などの存在から、居住域の縁辺部か、又は居住以外の目的で使用された区域の可能性がある。また、他の地区に比べ、出土遺物の量が極端に少ないという違いが見られることもその根拠の一つとしてあげられる。

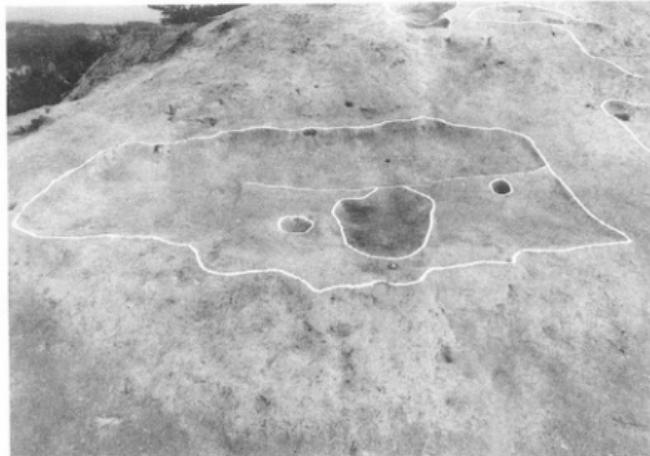


fig.146
S X09全景
(北から)

11. 長谷遺跡

1. はじめに

長谷遺跡は、明石川の支流である櫛谷川の中流域左岸にあり、櫛谷川が形成した河岸段丘上に位置する。今回の調査地の標高は約51mである。

当遺跡は、昭和58年度に西神中央線建設事業に伴い発見された遺跡であり、この時の調査で中世の集落址を確認している。また、櫛谷中地区土地改良事業（圃場整備）に伴い、その事業予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を昭和60年度に一部実施し、昭和61年度に行った試掘調査では中世の遺物が出土している。63年度には中世の遺構や中世の破碎された鉄型が入った土坑のほか弥生時代の中・後期の遺構も確認された。以上の成果から長谷遺跡には弥生時代及び中世にかけての遺跡の存在が予想され、平成元年4月に今年度の事業予定地内に試掘を行い、遺跡の存在を確認している。これらの成果をもとに神戸市農政局・神戸市緑農開発公社・神戸市教育委員会の三者協議のうえで、水路部分など保存の不可能な箇所について調査を実施した。

調査区は光松地区と佃井東地区に分け、光松地区にはA・Bトレーニチ、佃井東地区にはC・Dトレーニチをそれぞれ設定した。



fig. 147 調査地位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

- A トレンチ** L字形をなすトレンチで、3号支線排水路にあたる。トレンチの幅が異なるのは、排水路の掘削深度と除外地との関係からである。基本的な層序は、耕土・床土・灰色泥砂層・黄色の地山となり、地山面が遺構面である。灰色泥砂層には少量ではあるが、中世の遺物が含まれる。
- S K02** 遺構は、土坑2基・ピット1基・落ち込み状遺構1基である。SK02は、短辺に突出部をもつ炭の詰まった土坑である。遺構の延びる側は、除外地となるため規模は確認できなかった。土坑内より炭・焼土のほかには、遺物は出土しなかった。
- S K01** SK01も、同様に遺構の規模は確認できなかった。深さ0.1mの浅い土坑である。土坑内より遺物は出土しなかった。
- S X01** SX01は、0.1~0.3mの不整形な落ち込み状遺構である。遺構内より少量の土師器・須恵器片が出土した。
- 調査地南側の東西方向に延びる部分は、灰色泥砂層には礫が多く含まれていた。遺構は、検出されなかった。
- S X01**より北側は、緩やかに地山が下がっていく。堆積土は、灰色泥砂層と地山の間に、褐色泥砂層がある。灰色泥砂層・褐色泥砂層からは少量の土師器・須恵器片が出土した。
- B トレンチ** パイプラインおよび排水路の切土予定地にあたる。基本層序は、A トレンチと同様である。切土予定地である斜面は、比較的厚く灰色泥砂層が堆積していた。灰色泥砂層からは中世の土師器・須恵器片が出土したが、その量は少なかった。

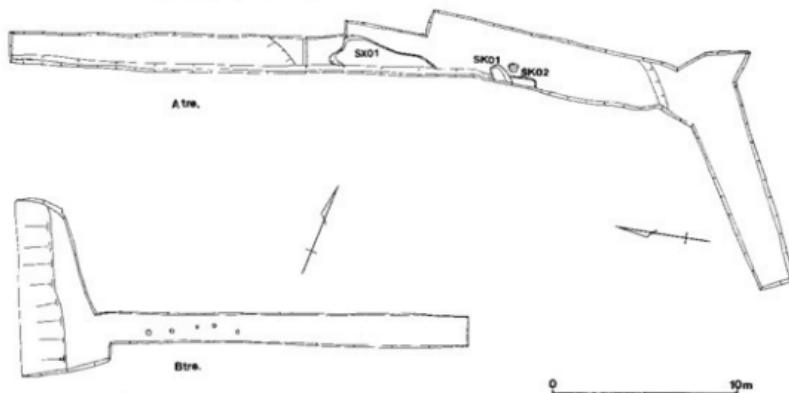


fig.148 A・B トレンチ遺構配置図



fig.149 A トレンチ全景（南から）



fig.150 B トレンチ全景（東から）

パイプラインとなる部分では、5ヶ所のピットが検出された。しかしながら建物などにまとまるものとはならなかった。

小 結

Aトレンチは、光松古墳が存在したと思われる尾根と現在の諏訪神社がある緩やかな尾根に挟まれた細い谷状地にあたる。Aトレンチ南側の東西方向の調査区で見られる洪水と思われる土砂の堆積層が示すように不安定な地形のため遺構・遺物が希薄であると考えられる。Bトレンチは光松古墳側の尾根の先端にある。調査区の制約があり、ピットの性格は不明であったが、昭和58年度の西神中央線建設事業に伴う調査と同様に尾根上には、中世の遺構が広がるものと考えられる。

また短辺に突出部をもつ炭の詰まった土坑の検出例は、昭和56年度櫛谷中学校内遺跡・昭和58年度西神中央線建設事業に伴う調査・昭和63年度と今年度調査とをあわせ、かなり広範囲に分布することが予想される。

Cトレンチ

C・Dトレンチは1号支線排水路予定地にあたる乙字形の調査区である。A・Bトレンチから見て、諏訪神社をはさんだ西側に位置する。Cトレンチの基本層序は、SD02より南側はAトレンチとほぼ同様であるが、SD02より北側は、灰色泥砂層下に褐色泥砂層が存在する。この層から弥生時代後期および古墳時代初頭の土器が出土する。そして褐色泥砂層下に遺構は検出される。特にトレンチ北半は、遺構面が砂層で、基盤となるような層は不明であった。

トレンチ南半は段丘上に位置し、固くしまった段丘疊層が存在する。

遺構は、溝状遺構4基・土坑5基・落ち込み状遺構6基・ピット2基が検出された。遺構内からの土器の出土量は少なく、時期の決定をしがたい遺構もあるが、基本的には、遺構の堆積土と層序から、灰色の堆積土は中世、褐色もしくは黒褐色の堆積土をもつものは、古墳時代から弥生時代のものと判断された。

遺物などの取り上げに際し、現況の水田に従って、1~5区に区分した。以下、検出された遺構を南の1区より略述する。

S D 01 S D 01は、一部二股になる溝状遺構である。幅約1m・深さ0.1~0.2mである。層序から中世のものと考えられるが、遺物は出土しなかった。

S X 02 S X 02は、S D 03を切る矩形の浅い落ち込み状遺構である。幅約1.8m、深さ0.1mで、少量の土師器・須恵器が出土した。中世の遺構と考えられる。

S K 02 S K 02もS D 03を切る遺構である。直径0.6m、深さ0.1mの円形の土坑である。遺物は出土しなかったが堆積土より中世の遺構と考えられる。

S D 03 S D 03は、幅約0.8m、深さ0.5mの溝状遺構である。褐色の堆積土で遺構内からは少量の炭片以外は出土遺物はなかった。

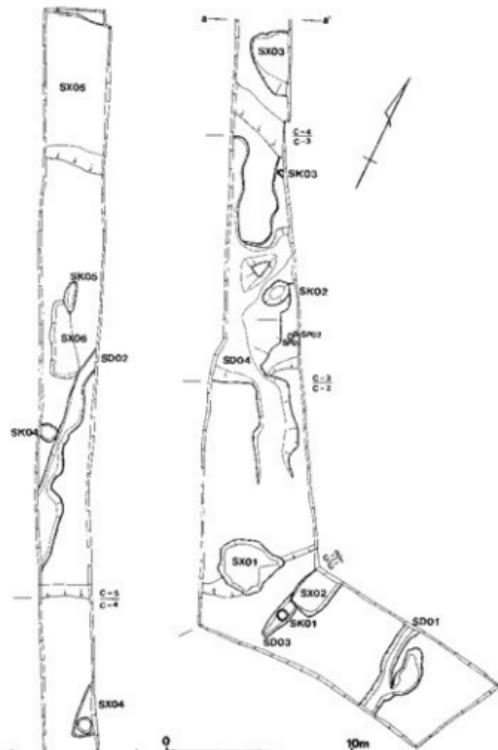


fig. 151 C トレンチ遺構配置図

- S X01 S X01は、現状の水田の段落ちに位置する不整形の遺構である。直径約3m、深さ0.5mの落ち込みである。遺構内より少量の土師器・弥生土器片が出土した。
- S D04 S D04は、2～3区にかけて検出された溝状遺構である。2区あたりでは溝状に検出されたが、3区では島状に残る部分があつたり、二股に分岐して検出された。この状態から人為的に掘削された性格をもたない自然の流路と思われる。出土遺物は、少量の土師器片のみであった。
- S K02 S K02は、S D04の東肩検出時に確認された遺構である。堆積土は褐色系でS D04より古い遺構とかんがえられる。出土遺物はなかった。
- S P01・02 S P01、02は、S D04の東側に検出された。両者ともに直径0.3m、深さ0.3mで、出土遺物はなかった。層序と堆積土から中世のものと考えられる。
- S K03 S K03は、3区北端に検出された直径0.4m、深さ0.1mの土坑である遺構内より弥生時代の甕形土器片が出土した。
- S X03 S X03は、直径3.4m、深さ0.2mの皿状の浅い落ち込み状遺構である。遺構内より弥生土器片が少量出土した。
- S X04 S X04も弥生土器片が少量出土する浅い落ち込み状遺構である。円形に深くなる部分があるが、深さは0.2mほどである。S X03・04とともに調査区外にのび、性格および規模は不明である。
- S D02 S D02は、幅約1～1.8m、深さ0.2mの溝状遺構である。S D02の両肩は、現状の水田の用水路によって搅乱を受け、本来の形状であるかは不明



fig. 152
C トレーンチ全景
(東から)

である。遺物は少量の弥生土器・土師器・須恵器片が出土し、中世の遺構と考えられる。

S K04

S K04は、直径0.9m、深さ0.1mの土坑である。出土遺物はなかった。

S X06

S X06は、長径4.2m、短径1.2m、深さ0.1mの落ち込み状遺構である。

S K05

サヌカイト片と弥生土器片が出土した。S K05は、長径1.6m、短径0.6m、深さ0.1mの梢円形の土坑である。出土遺物はなかった。S K04・05・S X06は、ともにSD02同様後世の搅乱によって旧状とどめていないと考えられる。S K04・05からは出土遺物はなかったが、S X06と同じ弥生時代の遺構と考えられる。

S X05

S X05は、北へ下がる遺構面に褐色泥砂層が堆積した落ち込み状遺構である。弥生土器壺形土器・壺形土器・高壺、サヌカイト片が出土した。深さは、最深部で約0.5mとなる。

小 結

Cトレンチの南側には、幅約40~60mの農業用溜池が3ヵ所ある。谷地形を堰き止めて溜池が築造された時期は定かではないが、Cトレンチの立地としては、この谷状地に連なる扇状地と考えられる。現在の諫訪神社がある尾根は安定した地形と考えられ、西側のCトレンチの位置する地形は、現状の水田の畦畔からも判明するように扇状地で度重なる洪水にみまわれたことが窺える。このため一部を除いて、安定した基盤がなく、鮮明な生活の痕跡は検出されなかったのであろう。

Dトレンチ

Cトレンチから直角方向に南西に延びるDトレンチでは、二時期の遺構面が検出された。

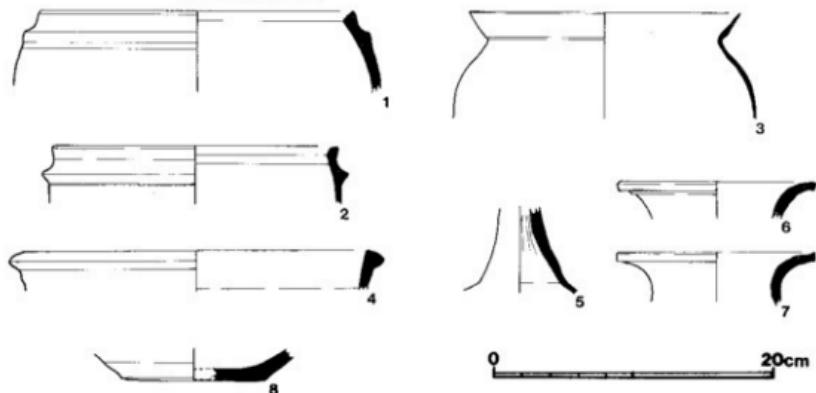


fig.153 B・Cトレンチ出土遺物 1:Bトレンチ西斜面 2:CトレンチSD04 6・7:SX05 3~5・8:遺物包含層

第1遺構面

第1遺構面は、概ね現水田および近世以降と考えられる水田の盛土層下で検出され、調査地中央付近（4～6）が高く、両側に緩く傾斜する鞍状の地形を呈する。このため、この遺構面に伴う遺物包含層は調査地両端部分でしか確認されなかった。

この遺構面では、土坑5基、溝8条の他、ピット、不定形な落ち込みなどが検出された。

SK01

SK01は、その大部分が調査地外であるが、円形と考えられる深さ45cmの土坑である。埋土中より、弥生時代後期の土器細片が出土した。

SK02・03

SK02・SK03は、いずれも方形の土坑であるが、深さが10cm以内と非常に浅い。土器細片が僅かに出土した。

SK04

SK04は、SX01を切っている長さ180cm、幅60cm以上、深さ60cmの不整方形な土坑である。埋土中層下は炭が堆積していた。土坑堆積土内からは土師器と思われる土器細片と須恵器1片が出土し、この遺構は古墳時代以降の時期と考えられる。

SK05

SK05は長径150cm、短径100cmの楕円形で深さ35cmを測る。弥生土器細片が出土した。

SD01

SD01は幅1.4m～2m以上、深さ20～30cmの溝で、北半部では炭層が上層から溝底まで堆積していた。この溝は、形状および溝内堆積土層からみて人為的に掘られたものと推測できる。溝内堆積土からは、弥生時代後

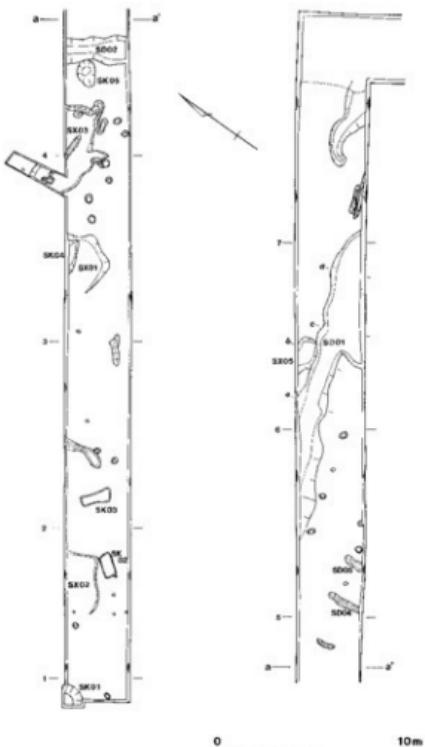


fig. 154 D Trench 第1遺構面平面図

期の土器片が出土した。

S D 02

S D 02は自然流路と考えられ、砂礫の堆積により埋まっていた。堆積土内より弥生時代後期の土器片が出土した。この溝は、後述する S D 22の最終期の堆積と考えられる。

S X 01～

03・05

S X 01～03・05のうち、S X 01～03は検出時は堅穴住居址かと思われたが、いずれも深さは20cm前後の不定形な落ち込みであった。いずれも弥生時代後期の土器片が出土している。S X 03では、溝、ピットが検出されたが、性格は不明である。S X 05は調査地外に広がっているが、土坑状の落ち込みと考えられ、弥生時代後期の土器が比較的多く出土した。



fig. 155

D トレンチ

第1造構面西半全景

(東から)



fig. 156

D トレンチ

第1造構面東半全景

(東から)

第2遺構面

第2遺構面は第1遺構面下約20~70cmで検出され、第1遺構面に比べ平坦である。この遺構面からは、溝状遺構4条が検出された。このうちの3条(S D22・23, S X21)は自然流路と考えられる。

S D21は幅60~100cm、深さ35~40cmで、ほぼ直線に延び、調査地内で約16mにわたり検出された。溝内堆積土の下半は砂礫層となっている。堆積土中より弥生時代後期と考えられる土器片が出土した。

S D22・23、S X21はいずれも自然流路と考えられる堆積状況であり、この立地からみて調査地南東側から洪水等により、短期間に形成されたと考えられる。S D22からは、比較的多くの弥生土器が出土し、後期前半頃と考えられる。



fig. 157 Dトレンチ第2遺構面全景(東から)

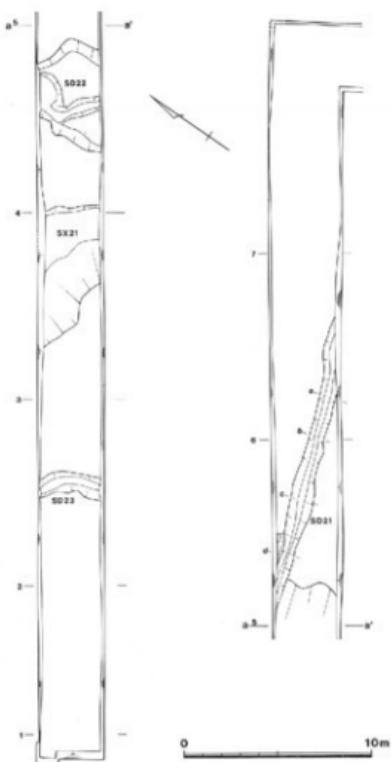


fig. 158 Dトレンチ第2遺構面平面図

小 結

このトレンチの立地も前述のCトレンチと同様で、遺構面が2面確認されたが、いずれも安定した基盤ではなかったと考えられる。特に第2遺構面では、洪水によると考えられる流路が形成され、その後の第1遺構面の形成までの堆積も、高位からの土砂の流入による状況が観察される。

第1遺構面では、明確に柱穴であると観察されるピットが数ヶ所で検出されたが、建物址としては確認し得なかった。今回検出された遺構のうちSK04は古墳時代以降と考えられるが、他は第1、第2遺構面とも弥生時代後期のなかで収まると考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、各トレンチとも地盤が不安定で、住居址などの遺構は確認されず、生活を営むにはあまり適さない場所であったと考えられる。

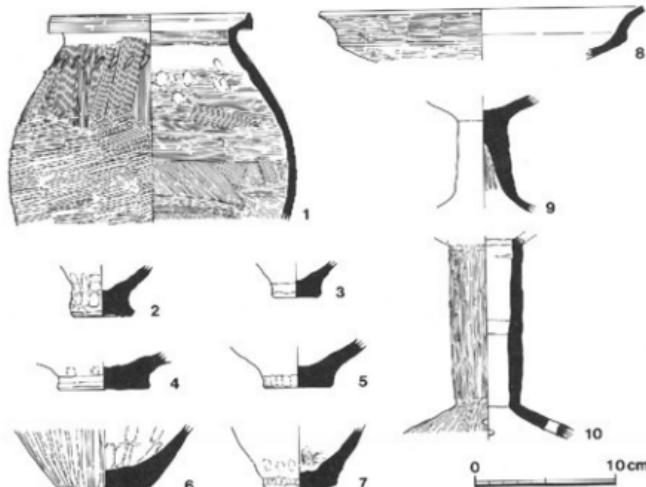


fig. 159
Dトレンチ
出土遺物



fig. 160
調査地遠景

12. 柿木遺跡

1. はじめに

神戸市西区から明石市にかけて流れる明石川流域には、いくつかの谷筋に沿って多くの遺跡がある。その谷筋の一つを流れる川が櫛谷川であり、櫛谷町柿木はその中流域に位置する。柿木地区は昭和60年度から土地改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。今年度は平成元年5月に実施した試掘調査に基づき、埋蔵文化財が確認された範囲で、切土、道路、パイプラインの工事が施工され、遺跡に影響が及ぶ部分約300m²について発掘調査を行った。

櫛谷川流域は、狭い河谷の中に形成された河岸段丘と氾濫原からなり、段丘上には弥生時代～中世にかけての遺跡が散在する。今回の調査地は櫛谷川右岸の段丘上に立地し、現在の川と調査地付近の比高差は約7mある。



fig. 161 調査地位置図 S = 1 : 2500

2. 調査の概要

今年度は第1地区（約204m²）、第1トレーンチ（約96m²）の2ヵ所の調査を行った。

- 第1地区** 17m×12mの長方形の調査区で、遺構面は北西から南東にかけて緩やかに下がり、両端の比高差は約0.3mである。基本層序は耕土層、床土層（茶褐色極細砂層）、淡灰色細砂（旧耕土層、炭、古墳時代～近世の土器を含む）、淡茶褐色細砂～極細砂層（旧床土層）、淡灰褐色細砂～極細砂層（盛土層）、黄灰色極細砂（遺構検出面、地山）となっており、地山以上の層のいずれからも土器が出土したがすべて二次的な堆積である。
- 遺構** 土坑、ピット、溝が確認された。遺構面が水田開墾時に削平を受けており、各遺構の残存の深さは、0.05～0.2mほどである。ピットの中には柱痕を有するもの、根固めの石を置くものがあるが、散在して検出され、掘立柱建物址としてのまとまりは確認できなかった。
- ピット**

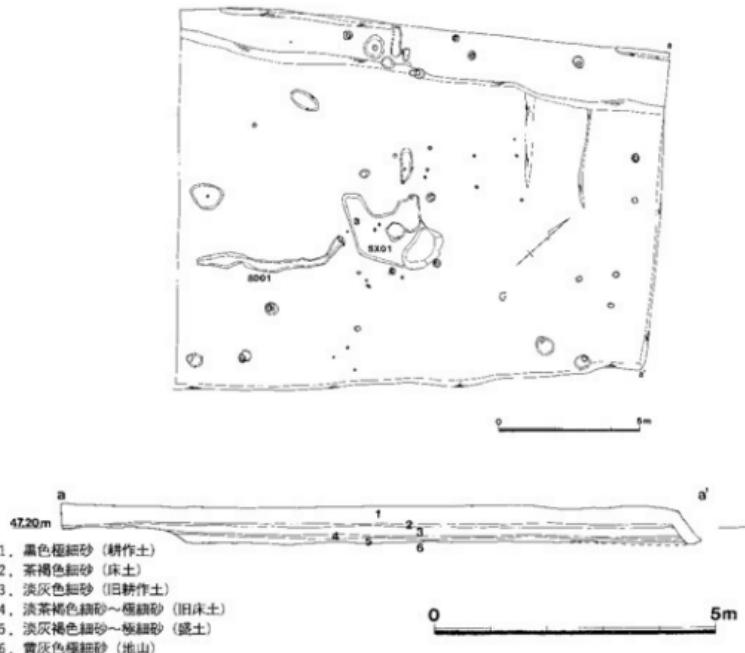


fig.162 第1地区 平面・断面図

S X 01 地区内の中央に位置し、最大長4m、深さ0.05~0.25mの不定型の遺構である。ほぼ中央に直径約0.5m、深さ約0.2mのピットがあり、その側壁は赤褐色に焼け、埋土内には炭が若干混入していた。埋土内からは古墳時代後期の土器が出土した。

S D 01 S X 01に接するように、溝S D 01が確認された。この溝は北東から北西方向にうねりながら延びている。全長約5.2m、幅0.3~0.4m、深さ約0.05mである。堆積土内からは、土師器が出土している。



fig. 163

第1地区
遺構面全景
(南から)

第1トレンチ 第1調査区の南西下方に位置し、同調査区から約2m下がる。
基本層序 北から南に下がる地形であり、土層の堆積状況も北側は堆積層が薄く、南側は厚く堆積している。基本層序は耕作土、床土の下には茶灰褐色細砂（盛土）、淡灰褐色細砂（旧耕作土）、灰褐色細砂（盛土）、褐色極細砂（平安時代～中世の遺物包含層）、淡褐色極細砂（少量の土器の細片、炭を含む）、淡褐色混疊細砂（遺構検出面）である。

遺構 第1トレンチ内からは土坑、ピット、溝等が検出された。
S D 01 トレンチ北半にあり、全長6.7m、検出幅約1m、深さ0.05~0.06mの浅い溝で、半分が調査区外に出ている。遺物はほとんど出土しておらず、時期は不明である。
S K 01 直径約1m、深さ約0.3mのほぼ円形に近い土坑で、ピットを削って掘削している。埋土内から拳大の円疊多数、平安時代の土器片が出土した。

SK02

遺構面を清掃中、SK01の南側で炭がまとまって検出され、精査を行ったところ方形のプランが確認された。その一部は調査区外に延びていたため約8m²の拡張作業を行った。その結果、2×1.4mの長方形の土坑が確認され、これをSK02とした。この遺構は短辺に約0.3mの突出部を有し、約0.15mほど窪んでいる。

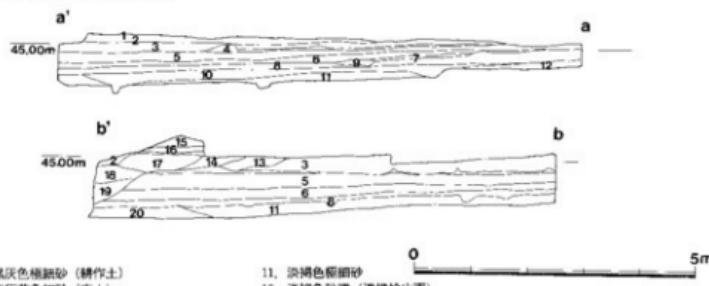
また、この周辺がよく焼けて赤く変色している。この部分は焼き口と考えられる。埋土内には細かい炭が多量に詰まっており、他の遺物は全く認められなかった。底面はほぼ平らでピット、溝等は検出されなかった。

また、第1トレンチでは遺構検出段階で、炭が集中して出土する所が數ヵ所確認されており、それらは当遺構から搔き出した炭を投棄した場所ではないかと考えられる。

なお、調査終了後埋土をすべて水洗したが炭、土器の細片以外の遺物は確認できなかった。このため当遺構の時期は明らかでない。



fig.164 第1トレンチ平面図



- | | |
|---------------------------|-------------------|
| 1. 黒灰色極細砂（耕作土） | 11. 淡褐色極細砂 |
| 2. 淡灰茶色細砂（未土） | 12. 淡褐色砂（遺構検出面） |
| 3. 基灰褐色細砂（盛土） | 13. 灰褐色細砂（盛土） |
| 4. 淡灰色細砂（旧耕作土） | 14. 基灰色細砂（盛土） |
| 5. 淡褐色細砂（旧耕作土） | 15. 黑灰色極細砂（焼付土） |
| 6. 灰褐色細砂（盛土） | 16. 基灰褐色細砂（盛土） |
| 7. 棕褐色細砂 | 17. 基灰色細砂（盛土） |
| 8. 棕褐色細砂（遺物包含層） | 18. 灰褐色細砂（盛土） |
| 9. 棕褐色細砂（遺物包含層、炭を多く含む） | 19. 基灰褐色細砂（盛土） |
| 10. 淡褐色極細砂（少量の灰、土器の細片を含む） | 20. 淡褐色極細砂（遺構検出面） |

fig.165 第1トレンチ断面図

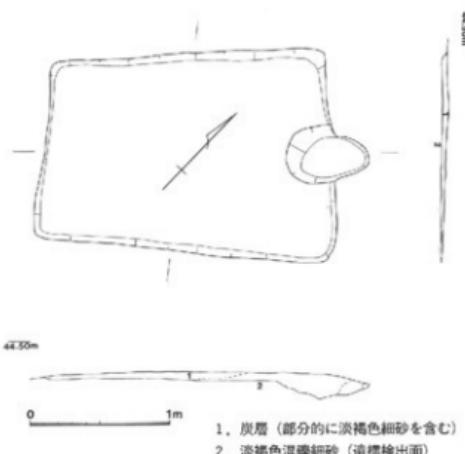


fig. 166 第1トレンチSK 02平面・断面図



fig. 167 第1トレンチ遺構検出状況（北から）



fig. 168 第1トレンチSK 02検出状況（南東から）



fig. 169 第1トレンチ遺構検出状況（東から）



fig. 170 第1トレンチSK 02セクション（南から）

自然流路

トレンチ北半部で遺構検出面を断ち割りしたところ、北東から南西に流れる自然流路が検出された。深さは約0.3mである。流路内からは土師器の細片が少量出土したが、工事によって掘削される深度より下で検出されたため、範囲の確認に止めた。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代～室町時代にかけての遺物、遺構が確認された。遺構については、時期、性格の不明なものが多い。特に、第1地区のSX01は不整形の遺構であるが、中央部にあるビットの壁面が焼けており、火を焚いた痕跡が認められた。このため、当初建物内の炉址であると想定し、周辺の精査に努めたが建物址等は確認できなかった。この用途については明らかでないが、屋外炉として使用されたものと考えることも可能であろう。

第1トレンチで確認されたSK02については、同種の遺構が明石川流域の各地で発見される。用途は現在のところ不明であるが、なにかの生産址という見方が有力である。時期については、平安時代～中世のいずれかに属するものであろう。櫛谷川流域では、池谷遺跡（昭和54年調査）、櫛谷中学校内遺跡（昭和56年調査）、長谷遺跡（昭和57、58年、平成元年調査）の3遺跡で確認されている。

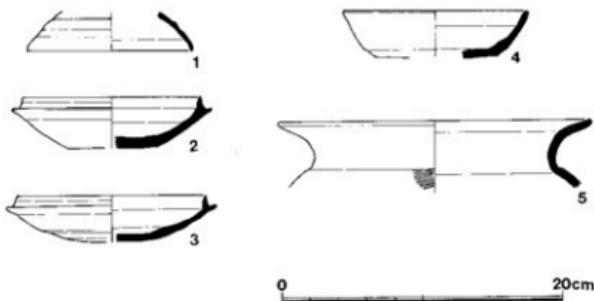


fig.171 楠木遺跡出土土器 1・2・5：第1地区SX01出土

3・4：第1トレンチ出土

1～4：須恵器

5：土師器

13. 狩口台遺跡 かりぐちだい

1. はじめに

昭和54年度に、狩口台6・7丁目の市営住宅地に、新たに住宅を建設する計画を受けて分布調査と試掘調査が行われた。この中で古墳状の高まりについては直径約50mの円墳であることが判明した（狐塚古墳）。また、この古墳の墳丘盛土内より縄文時代の石鐵や弥生時代中・後期の土器・石庖丁などが出土し、古墳周辺に弥生時代の遺跡の存在が予想された。

昭和61年度には、54年度調査成果のもとに古墳の範囲確認と周辺の弥生時代の遺跡の有無を確認する試掘調査を行った。その結果、狐塚古墳の外周墳復元径は約60mであると推定された。また、試掘調査では主に古墳の南東部に試掘トレンチを設け、弥生時代の遺跡の存在が確認された。

昭和63年4月には、市営住宅の解体に伴い住宅地内の試掘調査が行われた。その結果、古墳の存在する丘陵部分にはあらためて古墳および古墳の周辺と弥生時代の遺跡の存在を確認し、狩口台公園南側の住宅地跡で中世の遺物包含層を検出している。

それらの成果を受け、今回は住宅街区整備に伴う道路拡幅部分についての調査を行った。調査は平成元年3月22日より行われ、今年度4月以降も継続して行われた。今年度の調査は2回に分けて行われた。調査区3ヵ所のうち第1地区は先年度に終了し、残る第2地区について継続して調査が行われた。第2地区のうち東西のトレンチを4月に、南北のトレンチを8月～10月にそれぞれ調査を行った。

狩口台遺跡は垂水区の西端、狩口川と山田川に挟まれた標高40m前後の丘陵上に存在する。遺跡からは、南に明石海峡から淡路島、西に家島群島・小豆島、さらに四国まで望むことができる。



fig.172

調査位置図

S = 1 : 3000

2. 調査の概要 第2地区は、東西と南北の調査区が期間を隔てて調査が行われているが、本報告ではあわせて1地区とみなし、遺構番号も一連のものとして付することにした。

この地区では竪穴住居址6棟、土坑13基、溝1条のほかピットなどの遺構が検出された。

基本層序 基本層序は、表土(I)、暗褐色粘質砂(II)、黄褐色粘土(III)となっている。II層は弥生時代の遺物包含層、III層は地山で弥生時代の遺構面となっている。調査区内は旧市営住宅による搅乱を受け、II層の遺存状態は悪い。また、丘陵頂よりも狐塚古墳付近へ向かった斜面側は、さらに遺存状態が悪かった。斜面側には流土も堆積しており、流土中にも土器が含まれている。搅乱は一部III層にも達しており遺構面はかなり痛んでいる。

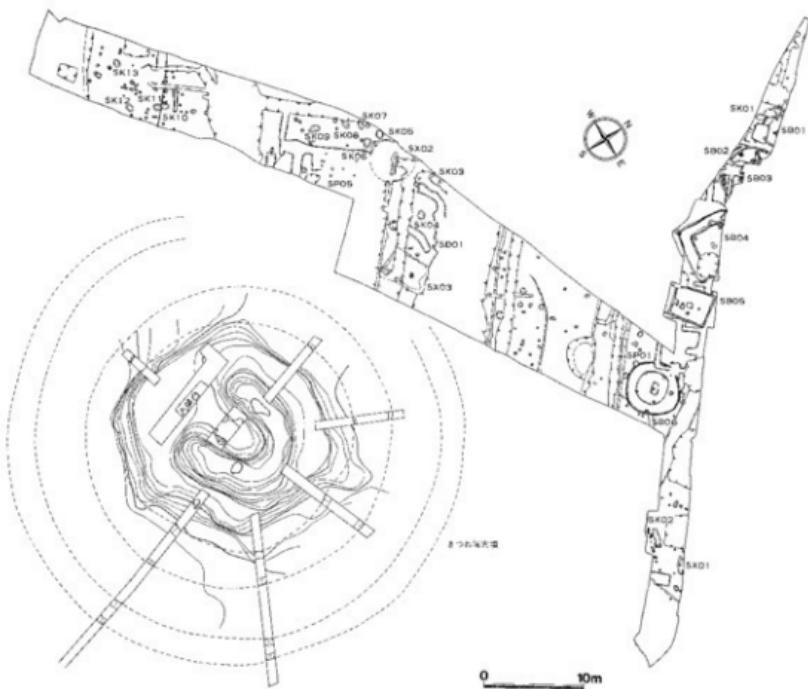


fig.173 第2地区遺構平面図 S = 1:300



fig.174 第2地区全景

検出遺構

第2地区では弥生時代の竪穴住居址6棟、土坑13基、溝1条、ピット多数などの遺構が検出された。竪穴住居址は調査区の北東部に集中している。しかし、狐塚古墳に向かった緩斜面では竪穴住居址は検出されなかつた。また、調査区から道路を挟んで北側は崖となっており、今回出土した住居址は集落のほぼ北端にあたると考えられる。調査区の南側は狐塚古墳付近まで平坦面が拡がつており、さらに住居址が検出される可能性はきわめて高いといえよう。このことは、削平が著しいS X02・03が竪穴住居址である可能性があることからもいえよう。

3.まとめ

全体的に遺物が少なく、遺構の時期を決し難いが竪穴住居址はいずれも第V様式のものと考えられる。SK02は遺物が豊富にみられ、紀伊産とみられる土器も含まれている。第II様式後半のものと考えられる。このほかの土坑も、遺物の明らかなものはいずれも中期に属している。

なお、今回の調査範囲内では狐塚古墳の周隣は検出されなかつた。



fig.175 狩口台遺跡から淡路島を臨む（左にみえる森は狐塚古墳）

14. 五色塚古墳

1. はじめに

五色塚古墳は、兵庫県下最大の規模を誇る全長194mの前方後円墳として、広く知られている。古墳本体は、約10年間におよぶ発掘調査ならびに史跡整備事業によって築造当初の姿を今私たちに見せている。

さて、五色塚古墳の後円部の周濠の外側には、幅3~5mの周溝が巡っていることが、これまでの調査で判明してきている。

今回の調査は、この周濠の外側に巡る周溝の位置や規模を明確にするために実施したものである。この地点は、マンション工事に先立って昭和60年度に実施した11トレンチと一部重複する地点で、保存区域となっている。昭和60年度の調査では、既存建物があったため、周溝の東側肩部から最深部を検出したに留まっており、この部分で周溝の西側肩部を検出するため、調査トレンチを設定した。



fig.176 調査位置図 S = 1 : 5000

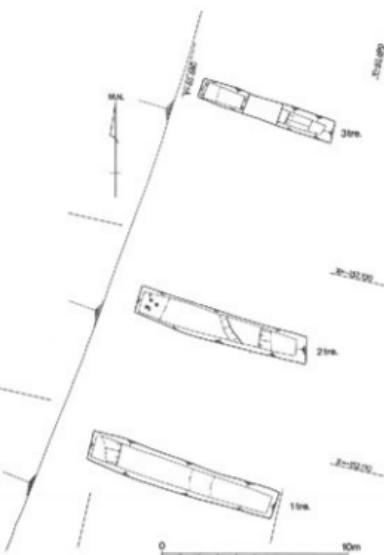


fig.177 調査トレンチ平面図

2. 調査の概要 発掘調査は、幅1.5mのトレンチを東西方向に適宜3本設定して実施した。南側から1・2・3トレンチとそれぞれを呼称している。

1 トレンチ 幅1.5m、長さ10.5mのトレンチで、現地表下約1.3~1.6mで礫混じりの赤黄色粘土層を確認した。トレンチ東半では、赤黄色粘土層に至るほど搅乱が著しいため、周溝は全く確認できなかった。その他には、トレンチ西端部で、礫を含む暗黃灰色砂質土を埋土とする西側へ急傾斜を呈する落ち込みを確認したにとどまる。しかしながら、この落ち込みは五色塚古墳の周濠東側肩部の可能性が指摘できる。1トレンチでは出土遺物は確認できなかった。

2 トレンチ 幅1.5m、長さ9.5mのトレンチで、現地表下約1.2~1.4mで礫混じりの淡黄色粘土層を確認した。

トレンチ東端から1.9mの地点で、周溝西側肩が確認でき、昭和60年度調査の成果を含めて復元すると、幅6.50m、深さ0.30mであることが判った。そして、この周溝西側肩から約2mの平坦面があり、ここから緩やかな傾斜で基盤層が西へ下がっていくことも判った。トレンチの西端約1mの部分では、基盤層から約10cm浮いているものの、鰯付円筒埴輪片を約10点確認した。これらの埴輪は、掘形が確認できていないが、出土状態からみて、周溝と周濠の間の平坦面に樹立されていたものと考えられる。

3 トレンチ 幅1.2m、長さ7.5mのトレンチで、現地表下約1m前後で礫混じりの黄色粘土層を確認した。

2トレンチと同様に、トレンチ東端から2.2mの地点で、周溝西側肩が確認でき、昭和60年度調査の成果を含めて復元すると、幅約6.00m、深さ0.30mであることが判った。しかし、トレンチ中央部分に大きな搅乱があるため、この肩はやや不明瞭なものとなっており、この肩部から徐々に基盤層が上がっていくことも判った。



fig. 178
五色塚古墳と
トレンチの配置



fig. 179 1 トレンチ全景（東から）



fig. 180 2 トレンチ全景（東から）

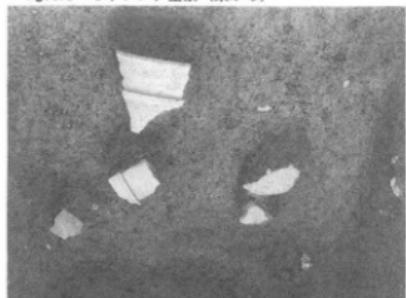


fig. 181 2 トレンチ西端埴輪出土状況（東から）



fig. 182 2 トレンチ東端周溝部分（南から）

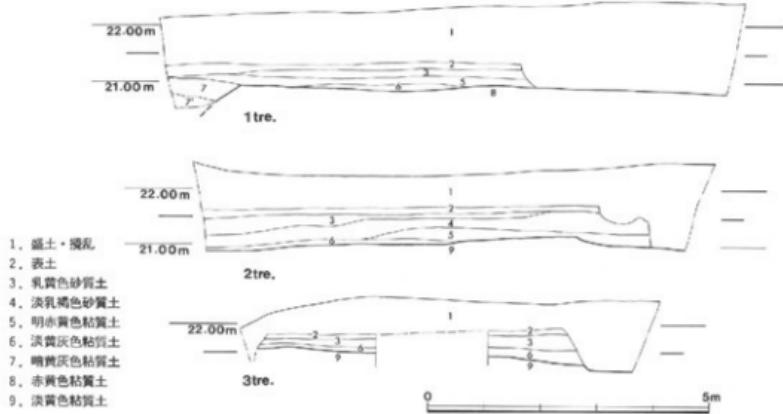


fig. 183 各調査トレンチ北壁断面図

出土遺物

出土遺物には、1トレンチ・2トレンチで検出した円筒埴輪などがある。1は2トレンチで出土した口径36.6cm、残存高46.7cmを測る円筒埴輪で、口縁部から突帯が3帯まで遺存する。口縁部は緩やかに外反して凹状の端面を有し、端部は鋭くつまみ上げられる。突帯はいずれも高く貼りつけられ、やや斜上方へつまみ上げられている。スカシは長方形のものが2方向に2段まで確認できる。調整については、外面が12本/cmの縦刷毛による1次調整、内面は左上がりの12本/cmの縦刷毛調整が部分的に遺存し、4~6cmの間隔で粘土帯接合痕が明瞭に遺存する。また、接合しないものの、同一個体と考えられる鱗の破片があり、鱗付円筒埴輪であったと考えられる。

2は1トレンチで出土した底部径38.6cm、残存高8.0cmを測る円筒埴輪基底部で、内外面ともに10本/cmの縦刷毛による1次調整が認められる。

3は2トレンチで出土したヘラ描き沈線の認められるもので、盾形埴輪片と考えられる。

この他に、外面7~8本/cmの刷毛調整、内面ヘラ削り調整の土師器の小片が1トレンチより2の埴輪片とともに出土している。

3.まとめ

今回の調査では、2本のトレンチにおいて、周溝の西側肩部を検出できたことが意義深い。これまでに行われた後円部の周濠西北部の調査では約3~5mの幅をもつ周溝が確認されており、今回の調査地点である後円部の東北から東側にかけて存在する周溝の方が幅6m前後を測るやや大きな規模をもつことがわかった。

なお、今回の調査で設定したトレンチは、すべて調査終了後、遺構面上30cmの真砂土を入れて保護・保存を図っている。

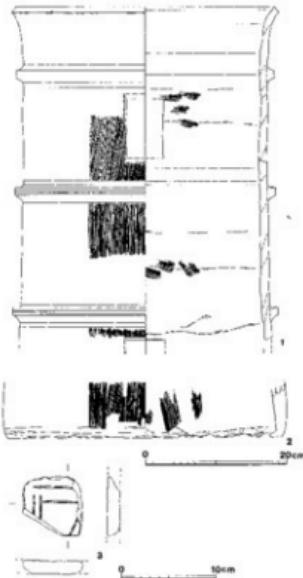


fig.184 五色塚古墳出土遺物

戎町遺跡（第4次調査）

1. はじめに

戎町遺跡は、山陽電鉄板宿駅の南北に広がると推定される、妙法寺川左岸の扇状地末端の微高地に立地する遺跡である。

これまで3次にわたる発掘調査が実施されており、繩文時代晚期から古墳時代前期および中世の複合遺跡であることが判明してきている。なかでも、弥生時代前期後半以前の小区画水田址・弥生時代前期後半（畿内第I様式新段階）・弥生時代中期（畿内第II～III様式）・庄内期の集落址など内容豊富な遺跡であり、西摂津西端に位置する弥生時代の拠点集落と考えられる。

今回の第4次調査地点は、戎町3丁目5-15に位置し、昨年度実施した第3次調査地点の東側に隣接する地点であり、第1次調査地点から約100m北西にあたる。調査地はテナントビルの建設予定地で、調査対象面積は、約300m²である。

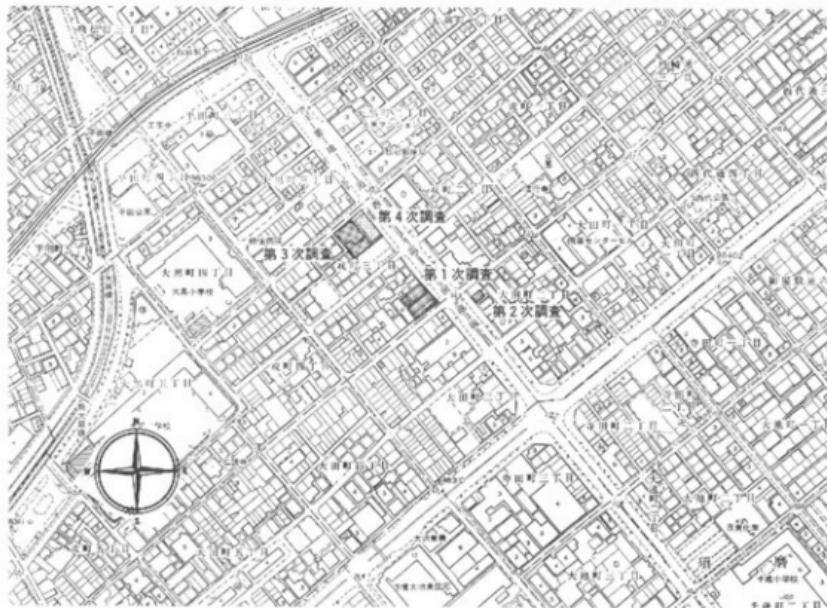


fig. 185 調査位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

第7遺構面

今回の調査では、7面の遺構面を確認した。

第6遺構面の河道2と第5遺構面の河道によって削平されていたが、調査区の西隅の約100m²で確認された遺構面である。縄文時代晚期の堆積層で、滋賀里III式～長原式に併行する土器片が出土しているものの、遺構は確認できなかった。

青灰色極細砂～細砂からなる、いわゆる地山層の上に黒灰色シルトが堆積し、この上層に縄文時代晚期の土器を包含する暗灰色シルトと黒灰色シルトが堆積している。これらのシルト層は妙法寺川の後背湿地を形成していたものと考えられ、縄文時代晚期の集落が調査地点からさらに上流域に存在する可能性が高い。なお、第3次調査地点で水田址の可能性が指摘された黒灰色シルト上面では、畦畔などの遺構は確認できていない。

第6遺構面

縄文時代晚期以降、弥生時代前期後半以前の遺構面と考えられる。

調査区東半で河道2と呼称している自然流路が確認され、この他の遺構は確認できていない。河道2は現状の最大幅6.5m、深さ1.4mで、北西から南東に向かって流下していたものと考えられる。遺物には、河道内から出土した多量の自然遺物

(植物遺体)があるのみで、土器などの時期を決定できる遺物は確認できなかった。

層位から判断すると、第1次調査地点で確認された小区画水田址と同一層位になるものと判断できる。



fig. 186 第6遺構面河道2断面

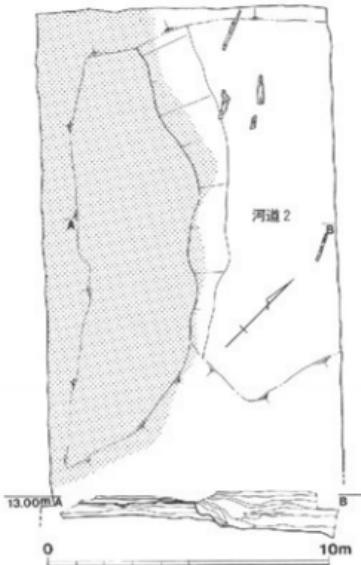


fig. 187 第6・第7遺構面平面図

第5遺構面

弥生時代前期後半（I様式新段階）の遺構面である。

調査区西半は第3次調査地点から続く遺構面が存在し、東半では第1次調査地点で確認された河道と同一と考えられる自然流路が確認された。

遺構面上には、不整形の落ち込み4基、土坑4基が確認された。

S X 138

S X 138は調査区外に延びる、緩やかに円弧を描く落ち込みで、復元径10mを測るものと推定できる。底面はほぼ平坦で、落ち込みの中央近くには、坑壁が低温の焼成を受けた直径約1m、深さ15cmの土坑がある。底面には柱穴が確認できていないが、竪穴住居址の可能性がある。

S K 123

S K 123は長径1.4m、短径1.0

m、深さ10cmの楕円形の土坑で、

S X 138内の土坑と同様、坑壁が低温の焼成を受けている。出土遺物には若干の弥生土器片がある。

河 道

河道は埋没状態から判断して、下層と上層に大別できる。

まず、河道下層は黄色系の砂層で埋没している。最深部は調査区東隅部にあり、遺構面からの深さ約2.5mである。完形の弥生土器の甕が1点出土したほかに、大型の弥生土器片・繩文土器片（晩期後半）や自然遺物（植物遺体）がある。

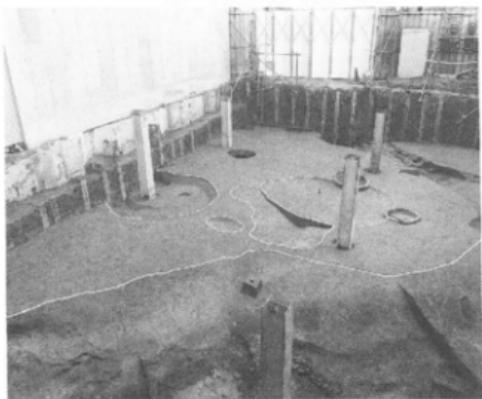


fig.188 第5遺構面全景（東から）

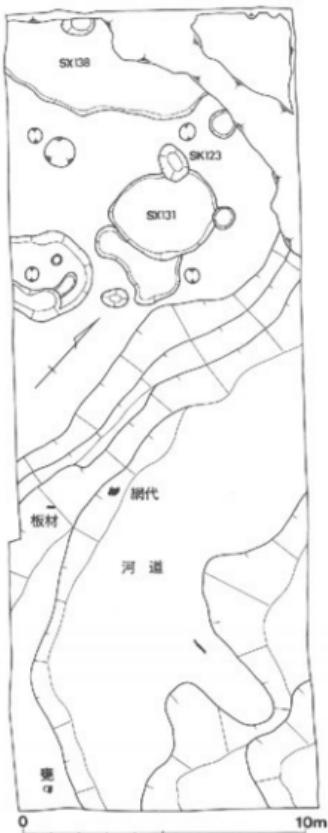


fig.189 第5遺構面平面図

下層が黄色系の砂層で埋没した後の上面には、河道西岸に沿うようにして杭列遺構と呼称している遺構が8基連なって検出できた。これらの杭列遺構は直径1m前後の土坑の上端に沿って、杭材をやや内傾気味もしくは真っ直ぐに打ち込んでいるものである。特に、SX136とSX137では打ち込んだ杭材の基部を外側から鉢巻き状に、蔓状のものや細く幅の狭い板材で杭材が広がらないように結束している。

杭材は、長さ1m前後のものが多く、最短で約40cm、最長約125cmのものである。直径約5cmの丸木材、これよりやや太い丸木を半截した半丸材、10cm以上の材をみかん割りにしたみかん割材、これより幅が広く薄手のいわゆる板材が用いられており、その配置には特に顕著な規則性は認められない。

これらの杭列遺構を埋没させたのは、緑灰色系のシルト質砂層を主体とする河道上層の埋土で、完形品を含む弥生土器（壺・甌・鉢など）、木製品（ヨコヅチなど）や自然遺物が多量に包含されている。

また特に河道肩部では遺物が集中しており、土器のほか木製農具（箕・網代・広鋤・大足など）、獸骨

（鹿？腰骨など）、種子（トチの実など）が集中している。この中でも、箕は神戸市内では玉津田中遺跡（弥生時代中期）に次ぐ2例



fig.190 第5遺構面河道下層上面杭列遺構（南から）



fig.191 第5遺構面 河道上層杭列遺構・出土遺物平面図

のもので、時期的には唐古・鍵遺跡（奈良県磯城郡田原本町・弥生時代前期古段階）に次ぐ、全国的にみても古い段階のものである。

なお、現地において詳細な調査が困難であったため、網代が入ったS X 128、網代2点（河道下層と河道上層から出土）、箕（河道上層肩部出土）はウレタンによって梱包し、今後詳細な調査を実施した上で、遺物の保存を図る予定である。

遺構No	形態	数	杭の形状				(出土遺物など)
			丸	半丸	みかん割	板	
SX128	楕円	22	6	5	10	1	板材・網代
SX129	円	16	5	1	9	1	土器底部（箕の圧痕）
SX130	方	21	0	0	0	21	
SX134	円	27	9	3	14	1	広鍬木製品
SX135	円	5	5	0	0	0	西半は開口
SX136	楕円	18	8	0	10	0	穿孔板材
SX137	円	28	7	1	19	1	同一針葉樹材使用
SX140	楕円	10	7	0	3	0	拳大の礫

表1 杭列遺構一覧表

第4遺構面

弥生時代中期前葉から中葉（II～III様式）にかけての遺構面で、弥生時代中期初頭に起きたと考えられる洪水によって運ばれた黄色系の砂層で形成されている。遺構には、竪穴住居址2棟、土器棺墓1基、土坑17基、溝状遺構6条、落ち込み11基、ピット34基があり、調査区全域にひろがり、遺構の頻度は極めて高い。

S B03

S B03は第3次調査地点で検出されたものに続く竪穴住居址で、今回の調査でその全容が明らかとなった。その規模は長径8.5m、短径約8mの平面形態がやや歪な円形であることが判った。床面にピット13基と拡張後の周壁溝1条が確認できた。13基のピットのうち、S P26とS P27は拡張後の主柱を構成するもので、拡張後は7本柱で上屋が形成されていたと考えられる。

出土遺物には、床面直上で検出した磨製石庖丁1点と打製石鏃1点のほか、弥生土器片がある。

S B04

S B04は円形に巡る周壁溝が切り合っていることから、直径約6mの円形竪穴住居址（S B04-1）と、直径約9m前後の円形竪穴住居址（S B04-2）の2棟が重複して建て替えられたものと推定できる。

中央土坑と考えられる炭の詰まった土坑が床面に2基検出され、中央土坑BがSB04-1に、中央土坑AがSB04-2に対応する。また、床面で65基におよぶピットを検出したが、このうち主柱と考えられるピットを確定することはむずかしく、その配置については現在なお検討中のため柱間等の詳細については明らかにできない。中でも、SB04-2に伴うと考えられるピットは2～3基が切り合うものと礎盤が確認できるものが多い。切り合っているピットはSB04-2の2～3回の建て替えを意味し、礎盤が多いのは第5遺構面の河道埋土の上に占地したため柱の沈下を防いだ造作と考えられる。さらに、SB04-2には幅2m前後、高さ5cmのベッド状遺構がある。

床面の出土遺物には、弥生土器（III様式新段階併行）と砥石、大型蛤刃石斧などがあり、埋土からは鉄製やりがんな、完形の大型蛤刃石斧や石錐などの多量の遺物が出土している。

ST01

ST01は、SB04-1の北西部の周壁下端部で確認されたもので、検出状況より土器棺墓と考えられる。明確な掘形は検出できていないが、壺形土器を正位置で据え、鉢形土器で蓋を被せたもので、壺形土器の底部以外は、SB04中央側へ崩れていった状態で検出した。土器の内部からの出土遺物は確認できていない。

SX112

SX112は調査区南隅部で検出した2段に掘り込まれた落ち込みで、規模は東西2.5m、南北3m以上、深さ50cmである。

1段目の底部に接して、II様式の壺2個体と甕1個体がつぶれた状態で検出された。

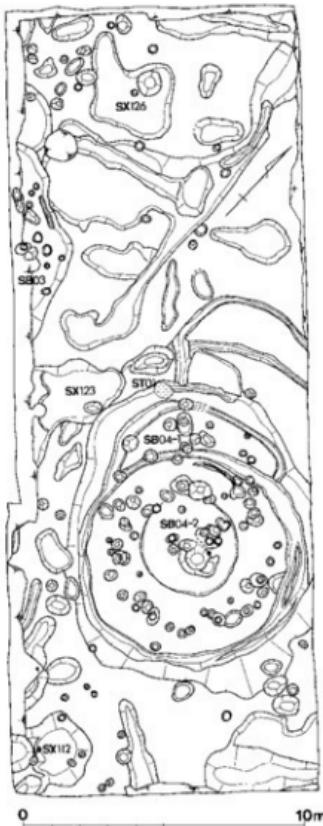


fig.192 第4遺構面平面図



fig. 193

第4遺構面 SB 03全景
(北東から)

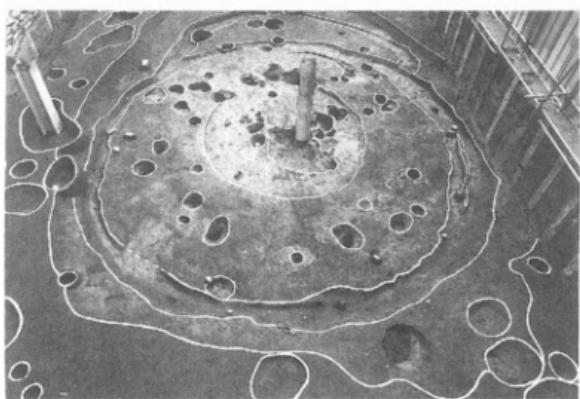


fig. 194

第4遺構面 SB 04全景
(南東から)

S X 123 S X 123は、東肩をS B 04-1によって切られた落ち込みで、西から東へ徐々に深さを増し、最大の深さ25cmである。東端に土器が集中して検出され、II様式の壺が多い。

S X 126 S X 126は、深さ15cm前後の不整形の落ち込みで、北端部に直径約1mの土坑がある。この土坑底に接して壺の口縁部とサヌカイト円疊、チャートの円疊が検出され、やや浮いた状態で壺の体部下半が出土している。

第3遺構面 庄内式併行期の遺構面で、弥生時代中期の包含層である褐色砂質土上面を基盤層とする。検出した遺構は、不整形な落ち込み3基、ピット5基、土坑である。

S X 108 S X 108は長さ4.5m、幅1.8m、深さ5cmの不整形の落ち込みで、中央部と北西端で弥生土器が集中して検出された。

S X 109 S X 109は長さ2.5m、幅1.1m、深さ10cmの不整形の落ち込みで、西半に弥生土器が集中して検出された。S X 108とS X 109の両遺構で出土した弥生土器は、器種別にみて壺の多いことが注目できる。

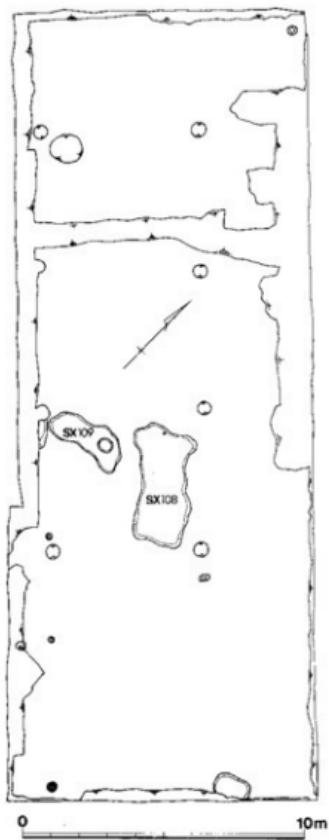


fig.195 第3遺構面平面図

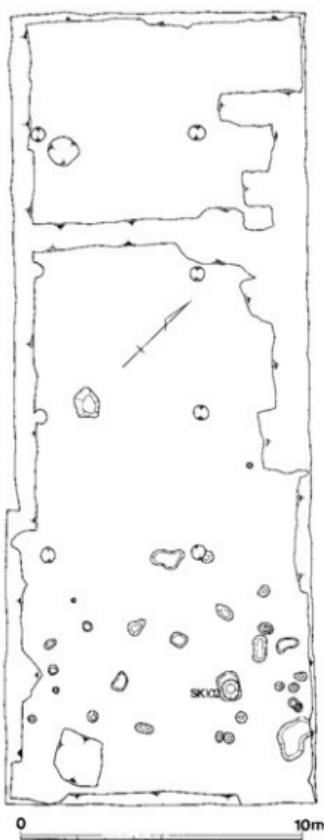


fig.196 第1・第2遺構面平面図

第2遺構面

布留式併行期の遺構面で、庄内式併行期の包含層の黒褐色粘質土上面を基盤層とする。後世の削平を受けたためか、遺構は4・5区に集中している。遺構は、ピット22基、落ち込み6基、土坑1基が検出された。遺構の埋土は、いずれも乳黄色シルト質極細砂である。

SK102

SK102はF-4区で検出した円形の土坑で、規模は直径約1m、深さ35cmである。最下層には厚さ3~4cmの炭灰層が堆積しているのが特徴的である。



fig.197
第3遺構面全景
(北西から)



fig.198
第2遺構面近景
(北西から)

第1遺構面 時期決定のできる遺物が出土していないため、遺構の時期は明確にできない。不整形の落ち込み1基、土坑1基、ピット1基を検出しており、いずれも埋土は暗灰色シルトである。

- 3.まとめ
- ①今回の調査では、各遺構面に伴うさまざまな成果を収めることができた。縄文時代晩期の水田址の存在の可能性は低くなったものの、当該期の集落の存在が推定できる。
 - ②河道2は第1次調査地点で検出された小区画水田址への引水と深く関わりがあるものと推定でき、稻作技術の伝播とともに水田開発技術の一端を知るがかりを示すものと考えられる。また、この水田址を営んだ集団の集落の確認が期待されるところである。
 - ③弥生時代前期では、遺構、遺物ともに注目すべき成果が得られた。遺構では、河道下層上面で検出した8基の杭列遺構がある。その性格については、さまざまな視点から考察を加えていかねばならない。これらの

杭列遺構は、全国的にみても良好な資料が極めて少なく、島根県西川津遺跡例（弥生時代前期3例・弥生時代中期23例）の26基を挙げ得る程度で、戎町遺跡でも第1次調査地点とあわせてこれまでに合計14基が確認されたことは注目に値する。これらの遺構は当該期の生活様式の一端を見ることができる重要な資料で、その性格の追求は今後の重要な検討課題のひとつである。

遺物では、完形品を含む多量のI様式新段階の弥生土器はいうまでもなく、杭材を含む豊富な木製遺物が注目できる。広鉗（未製品を含む）、箕、ヨコヅチ、大足などの農耕具は、当該期の農耕技術とその実態を推定する上で、考古学的にも民俗学的にも有効な資料と考えられる。

さらに、これらの遺物の出土状況からみて、集落は近接する地点で今後確認できるものと予想できる。

④弥生時代中期では、集落址の中心部を明らかにできたものと考えられる。特に、堅穴住居址の移動が顕著に確認でき、S B03（III様式古段階・拡張）→S B04-1→S B04-2（III様式新段階・2～3回建て替え）の順に、III様式の間に6回前後の移動が至近距離で行われたことが推定できる。

また、投棄された多量の弥生土器、石製品は当該期の生活を如実に反映するものと考えられる。

⑤庄内期では、まとまった弥生土器が出土し、当該期の土器様相を知るうえでの資料を提供した。

⑥布留期では、他の遺構面と比較して遺構、遺物に恵まれなかった。後世の削平によるものと考えられ、この後、当地域では土砂の堆積が極めて少なかったことを物語っている。

⑦第1遺構面は時期こそ不明瞭ではあるものの、第2次調査地点で確認できた中世の遺構面とは層序が異なるため、布留期以降中世以前の遺構面と推定できる。

16. 戎町遺跡（第5次調査）

1. はじめに

戎町遺跡は山陽電鉄板宿駅の南北に広がると推定され、妙法寺川左岸の扇状地末端の微高地に立地する遺跡である。

これまでの調査で、縄文時代晩期から古墳時代前期および中世の複合遺跡であることが判明してきている。なかでも、弥生時代～庄内期の遺構・遺物が多く確認され、西摂津の最西端に位置する弥生時代の拠点集落と考えられる。

今回の第5次調査地点は、戎町2丁目8-2に位置し、昭和62年度に実施した第1次調査地点から約50m北で、第3・4次調査地点の東へ約75mに存在する。

店舗兼マンション建設予定地で、調査対象面積は、約130m²である。ビル建設に係わる掘削深度が舗道上面レベルより-1.5mまでのため、この深さまでの調査に止め、下層の状況については2×2mの調査区を設定して調査を実施し、基本的には保存することを申し合わせて調査を開始した。



fig.199 調査地位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

第1遺構面

今回の調査では、3面の遺構面について全面発掘調査を実施した。

第1遺構面は古墳時代前期（布留期）の遺構面で、土坑2基、溝状遺構1条、ピット5基を確認した。遺構面の標高は約13.4～13.5mで、南から北へ緩やかに傾斜している。

S D01

S D01は幅2m前後、深さ約50cmの溝状遺構で、西から東へ流れていたものと考えられる。埋土は黄色系ないしは褐色系の細砂層で構成され、短期間のうちに埋没したものと考えられる。出土遺物には、弥生時代中期葉の壺の口縁部と磨製石庖丁があり、下層の遺物包含層を削ってきたものと推定される。また、S D01の南側肩部の遺構面直上からは、土師器壺1個体が出土している。

S P01

長径74cm、短径28cm、深さ5cmの楕円形に近いピットで、弥生時代末の壺の口縁部が出土している。

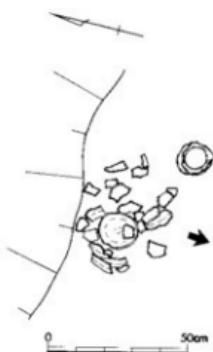


fig.200

第1遺構面土器出土状況図

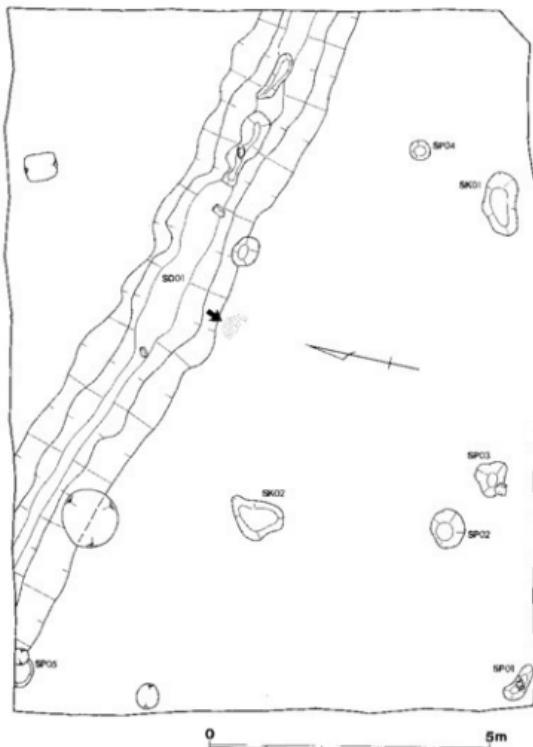


fig.201

第1遺構面平面図

S P 03 長径62cm、短径53cm、深さ8cmの不整形のピットで、弥生時代中期の壺の底部がピット底よりやや浮いた状態で出土している。

第2遺構面 第2遺構面は弥生時代後期末から古墳時代前期（庄内期）の遺構面で、落ち込み4基、土坑4基、溝状遺構1条、ピット17基を確認した。なお、調査区の北半については南から北にむかって緩やかに傾斜している。この緩やかな傾斜面は後述する大きな落ち込みを最後に埋没させた土層にあたると考えている。

S K 04 S K 04は、長径1.2m、短径60cm、深さ6cmの土坑で、西端の底から小型器台が出土している。

S D 02 やや円弧を描き東西方向に走る溝状遺構で、最大幅48cm、長さ2.7m、最大深さ10cmである。溝底には直径25cm前後のピットが2基ある。

S X 03 深さ15cmの不整形な落ち込みで、調査区外へ延びている。底面にはピットが3基あり、S P 01では火を受けた偏平な砂岩が出土している。

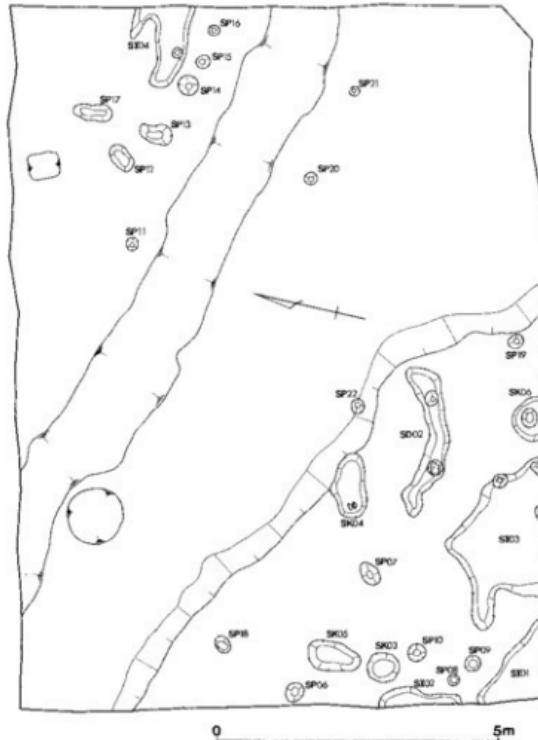


fig. 202
第2遺構面平面図

第3遺構面

第3遺構面は当初、弥生時代中期の遺構面と考えていたが、断割の土層などを検討した結果、弥生時代前期～中期に埋没した調査区全面に広がる大きな落ち込み内の埋土の違いを遺構として調査していたようである。

S X 05

復元径約8m、深さ10cm前後の落ち込みで、埋土は淡褐色砂質土からなるが、この遺構も落ち込み内の埋土の一部と考えている。出土遺物には、弥生時代前期～中期の土器があり、中期に属すると考えられる土玉も1点出土している。

落ち込み

第2遺構面と同様、調査区北半にひろがるものである。中央付近の乳黃灰色細砂質シルト内から壺と高坏が押しつぶされた状態で検出された。これらの土器は祭祀に関係するものと考えられる。

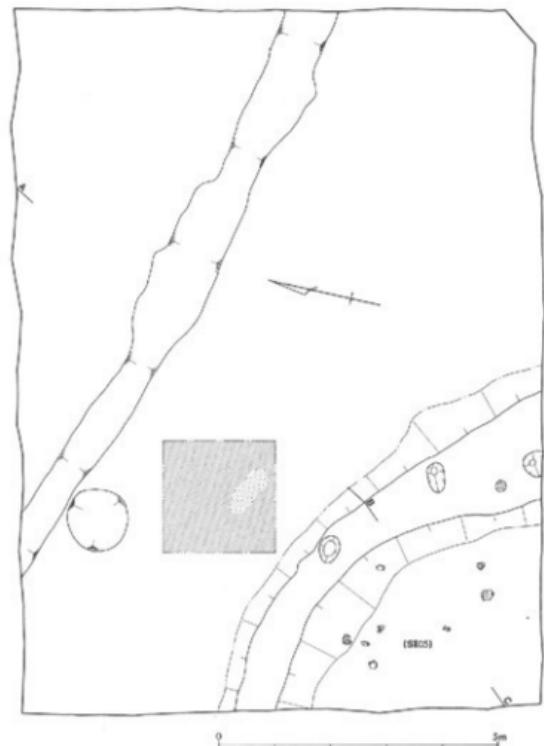


fig. 203

第3遺構面平面図（網線部分は試掘坑）



fig.204
第1遺構面全景
(西から)



fig.205
第2遺構面全景
(北から)



fig.206
第2遺構面全景
(西から)

第3遺構面
下層の調査

上述したように、基礎レベルの到達しない下層部分については、 2×2 mの試掘坑を設定して、埋蔵文化財の有無を把握するため調査を実施した。

調査の結果、弥生土器と石器を包含するシルト系の土層が続き、埋蔵文化財はさらに下層にまで及ぶことが確認できた。なお、第1次調査地点で確認された水田址と酷似する土層が標高12.4m前後で検出できている。

3.まとめ

今回の調査におけるそれぞれの遺構面の成果をまとめると、以下の通りである。

①第1遺構面では、遺構・遺物が少なかった。後世の削平によるものと考えられるが、SD01のように深い遺構は遺存していることからみると、集落の存在した可能性が高い。

②第2遺構面では、遺構面の遺存する南半と落ち込みの最上層にあたる緩やかな傾斜を確認した。

③第3遺構面以下については、今回の調査区内では深さ約1mの大きな落ち込みが確認された。約15層からなる埋土の観察から判断すると、土石流などで一気に埋没したものではなく、長期間にわたって徐々に埋没していくものと考えられる。

④出土遺物では、これまでになく弥生時代末の出土器種が豊富で、これまでの成果を補強することができる。

今回の調査地点における成果およびこれまでに実施した周辺の調査成果を総合して判断すると、今回調査した地点は弥生時代前期から中期にかけて徐々に埋没していく微高地の縁辺部の後背湿地にあたるものと考えられる。そして、この後背湿地の埋没が完了した段階の弥生時代末以降になって初めて集落として占地ができた地点といえよう。



fig.207
第3遺構面
落ち込み
出土土器

ながたじんじゃいれき
17. 長田神社境内遺跡

1. はじめに

当遺跡は、長田町1丁目から3丁目及び大塚町1丁目から3丁目にかけて位置しており、標高85mの会下山から西へ派生する尾根の末端部及び苅藻川によって形成された沖積地上に立地している。

これまでの調査の結果、縄文時代晩期の土坑をはじめ、弥生時代後期の竪穴住居址・壺棺墓・溝・土坑・ピット、古墳時代後期の溝・ピット、平安時代末の木棺墓の他、鎌倉時代～江戸時代にかけての井戸が検出された。

今回の第3次調査は、長田商店街1丁目東地区民間再開発事業に先立ち、昭和63年4月に試掘調査を実施したところ、遺物包含層又は遺物が確認されたため、平成元年3月29日から発掘調査を実施することとなった。

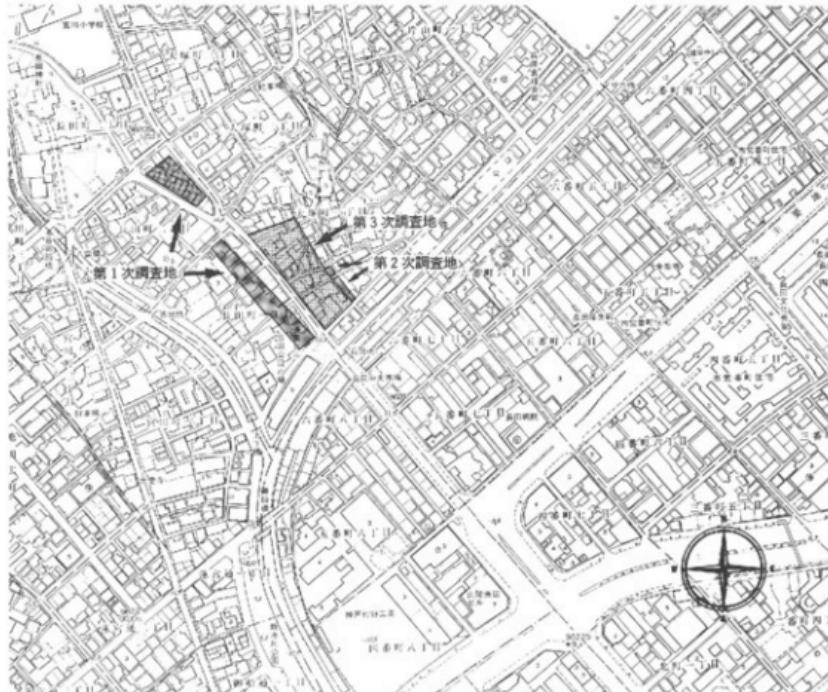


fig. 208 調査位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

第1遺構面

現地表下約1mで検出した遺構面である。鎌倉時代～江戸時代にかけての掘立柱建物址、井戸、溝、ピットを検出した。中央部周辺は現地表下約0.8mで黄灰色粘質土の地山面を検出している。また南半の遺構面のレベルは現地表下約1.8m(標高12.6m)である。

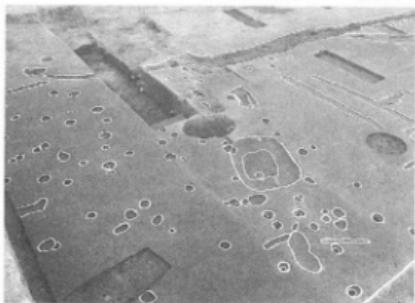


fig.209 第1遺構面南側全景（南西から）



fig.210 第1遺構面北側全景（北西から）

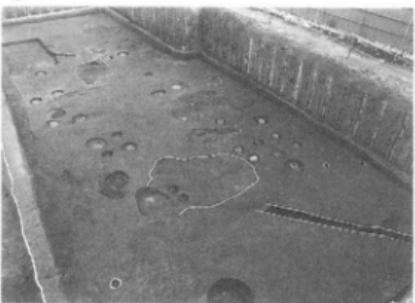


fig.211 第1遺構面南端全景（西から）



fig.212 第1遺構面平面図

調査区北半にある掘立柱建物址1は、東西4.6m、南北3mの4間×2間である。調査区南半の掘立柱建物址2は、1間×2間(2.5m×3.7m)の規模である。

井戸は、すべて石組であり掘形の直径は約2~3mである。

第2遺構面

現地表下約1.3mで検出した遺構面である。後世の搅乱により不明確な部分が多いが、北半は不整形、南半は比較的整然とした小区画の水田址を合計35区画確認した。面積は概ね10~20m²である。洪水砂によって埋没しており、耕作土上面において足跡を検出した。時期は、古代末~中世初頭の可能性がある。

第3遺構面

現地表下約2.5m(標高12.50m)で検出した遺構面である。

自然河道の最終堆積層である青灰色シルト層の上面において検出されている。庄内併行期頃(3世紀頃)の土坑をはじめ、ピット、土器群を検出した。

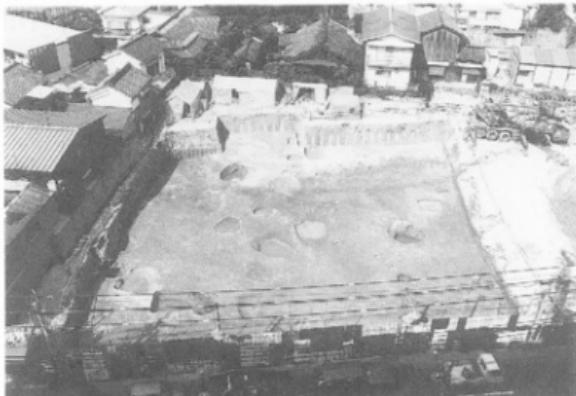


fig.213

第3遺構面北側全景
(西から)

第4遺構面

調査区北半では現地表下約2.8m(標高12.20m)で、南半では、現地表下約2.3m(標高12.25m)で検出した遺構面である。弥生時代後期の堅穴住居址・土坑、ピット、自然流路などを検出した。

堅穴住居址1

調査区中央部やや北寄りで検出した住居址である。直径約7mで、6基の主柱穴と中央土坑が検出された。遺物は弥生土器のほか、サヌカイト片も出土している。

SK03

調査区の北半で検出した梢円形の土坑である。弥生土器壺・甕・高坏・鉢などが出土している。

SK04

調査区の北端で検出された橢円形の土坑である。弥生土器壺・甕・高坏・鉢などの他、炭化材が出土している。

第5遺構面

調査区南半の現地表下約2.6m(標高11.9m)で検出した遺構面である。土坑・溝状遺構を検出した。時期は、縄文時代晚期から弥生時代前期と考えられる。

自然河道

調査区北半の現地表下約3.0m(標高12.00m)より下層の層序は、青灰色シルト層と淡黄褐色砂質土が互層に堆積しており、自然河道と考えられる。今回の調査では、河道の南岸が検出されており、自然河道の川幅は南北方向で40m以上である。南岸付近での川底までの深さは、約4mである(標高は8.7m)。

遺物は、上層からは弥生時代後期後半頃の土器が多く、下層になるにしたがって弥生時代後期前半の土器が多くなる。最下層では、縄文時代晚期の突帯文土器をはじめ、弥生時代後期前半の土器が出土している。また、流木及びドングリなどの種子類・木の葉等が出土している。

fig.214

第4遺構面竪穴住居址1
(西から)



fig.215

自然河道
土器出土状況(1)



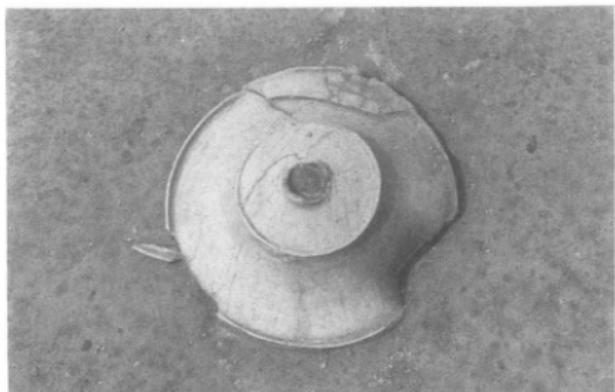


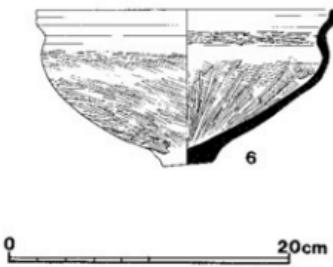
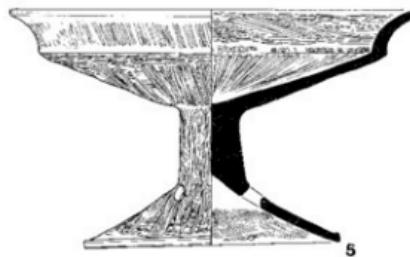
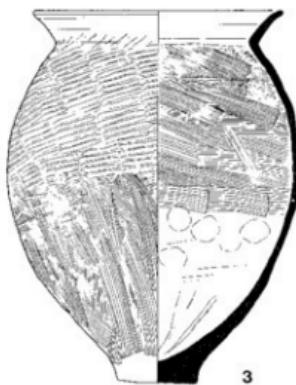
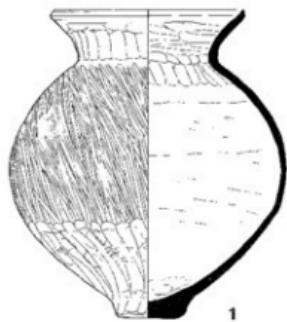
fig. 216
自然河道
土器出土状況(2)



fig. 217
自然河道
土器出土状況(3)

3. まとめ 今回の調査により、昭和62年度調査区の東側にも中・近世の掘立柱建物址・井戸・木棺墓等が確認され、さらに古代末～中世初頭の水田址も検出された。当時の人々の暮らしを窺い知れる資料である。

調査区北半では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての旧河道を検出した。第1次調査では不明であった河道の南肩が判明し、また河道の底も確認できた。さらに、弥生時代後期の竪穴住居址は、第1次調査で検出された竪穴住居址と共に、当地における弥生時代から古墳時代への集落を復元していくうえで貴重な資料である。



0 20cm

fig. 218 自然河道出土土器

18. 三番町遺跡

1. はじめに

三番町遺跡は、神戸市長田区二番町～三番町一帯に広がる遺跡である。昭和62年度に妙見山麓遺跡調査会が行った発掘調査では、古墳時代の集落跡が確認されている。昭和63年度には、財団法人神戸市スポーツ教育公社によって今年度調査地の東隣の調査が行われ、中世の水田址、弥生時代～古墳時代の自然流路、溝、ピット等が検出された。この度の調査は、市営住宅の集合所建設予定地約90m²の発掘調査を実施した。

今回の調査は第5次調査にあたる。

この遺跡は、茹藪川によって形成された扇状地上に立地し、北西が高く南東方向に地下がりの地形となっている。

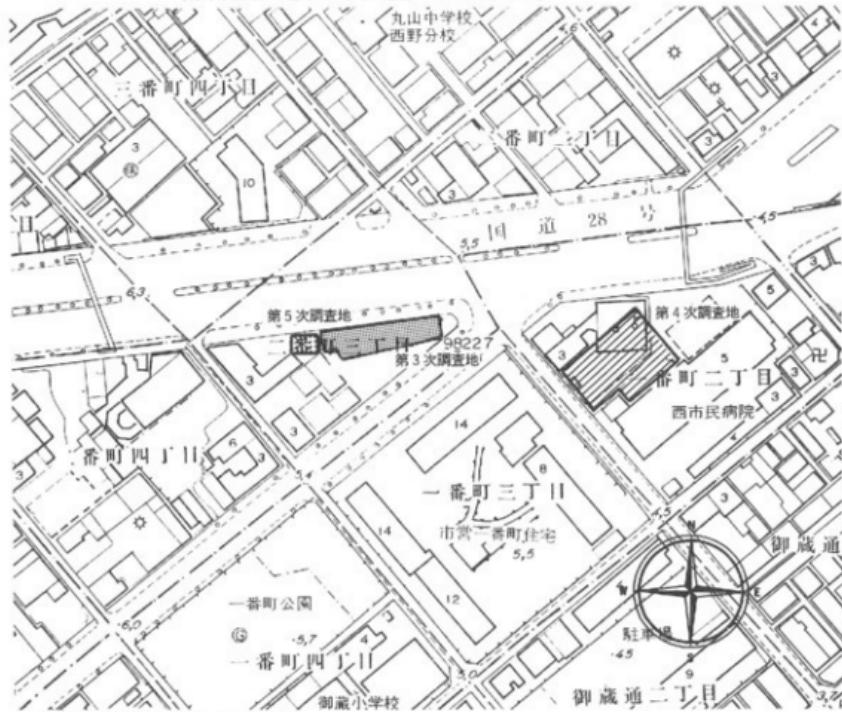


fig.219 調査地位置図 S = 1 : 2500

2. 調査の概要

調査は、7月12日より重機による掘削を開始した。その後、遺構面の精査を行い古墳時代後期のピット、土坑、溝等を検出した。それらの遺構の写真撮影、実測作業終了後、断ち割り調査を実施したところ、遺物を若干包含する土層を確認した。直ちにこの土層の人力による除去を行い、さらに下層の埋蔵文化財の有無を確認した。8月2日よりダンプの進入部分の調査を行い、8月4日に現場における作業を完了した。

基本層序

調査前には、店舗が建っていたため、厚さ約0.05mのコンクリートが調査範囲のほぼ全体を覆っていた。その下は、近・現代盛土層、旧耕作土層淡褐色細～中砂層、黒褐色細砂層（古墳時代遺物包含層、局部的に厚さ約0.02～0.05m程度残存している）、淡褐色極細砂層（古墳時代遺構面）黒灰色シルト層（遺物を若干含む）、淡黄灰褐色細砂層の順に堆積し、それ以下は淡褐色～灰褐色粗砂、小礫層が連続していた。

現地表面より淡黄灰褐色細砂層までの深さは約1.9mである。

遺構

淡褐色極細砂面では古墳時代遺構（溝3条、土坑2基、ピット25基）を検出した。遺構面は一部、近現代の建物基礎によって破壊されていたが、当初の予想よりも良好に遺存していた。

S D 01

調査範囲の南端を東西に延びる溝で、東半で浅くなり消失している。検出長約9.6m、検出幅約2.4mである。深さは一様ではなく、かなり凹凸が激しい。検出状況からみて人工的に掘削されたのではなく、自然流路と考えられる。なお堆積土内からは、古墳時代後期末の須恵器、土師器が出土した。

S D 02

S D 01に削られる南北方向の溝で、S P 06の埋没後に流れている。検出

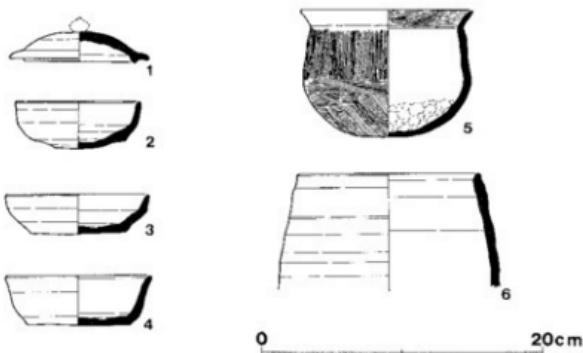


fig.220 S D 01出土土器 5：土師器 他：須恵器

長約1.7m、検出幅約0.3m、深さ約0.04mである。

S D03 調査区北西端で一部のみ検出された東西方向の溝である。検出長約0.8m、検出幅約0.2m、深さ約0.03mの浅い溝である。

S K01 調査区東端に位置し、不整形な遺構である。西南部は、凹凸が多い。深さは0.05mほどである。S K01はグンプの進入路部分の調査の際に確認した遺構であるが、この部分の遺構面は遺存度が悪く、遺構の上部が消失している。また、S D01の東端部が不自然なありかたをしていることからもS K01はS D01の一部ではないかと推定される。

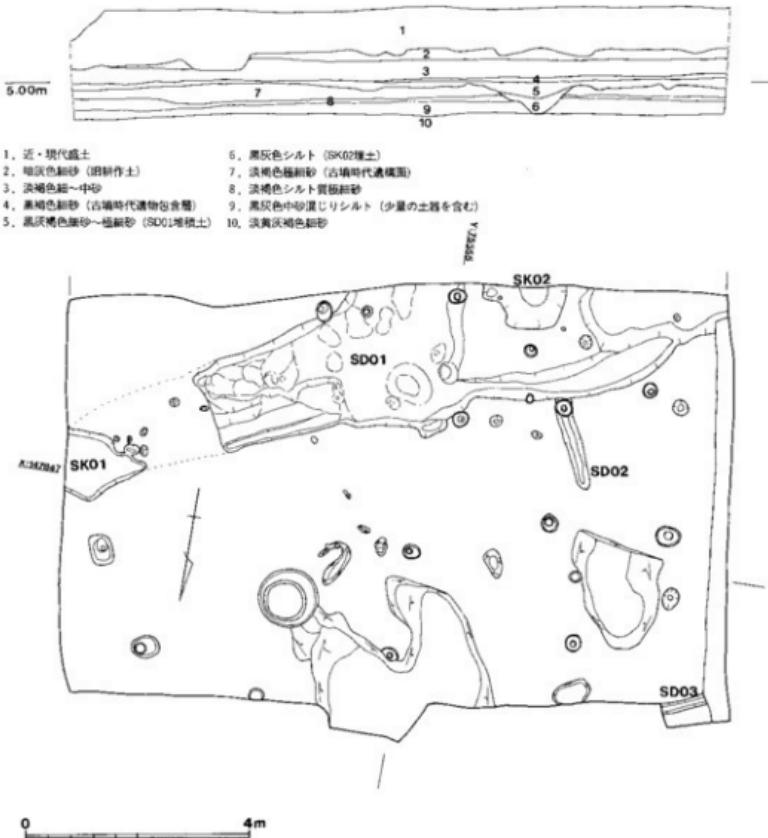


fig.221 遺構平面・断面図

SK02

調査地南端で検出され、大半が調査区外に出ている。断面観察から、SD01の流れる以前に掘り込まれた穴であることが確認されている。埋土内からは古墳時代後期末の須恵器が出土した。

ピット

調査地内に散在する状態で25基確認された。その中には柱痕を残すものがある。限られた調査範囲内では規則性を確認できず、穿たれた目的は明確でない。



fig. 222
遺構面全景
(南西から)

黒灰色

古墳時代の遺構の調査完了後、断ち割り調査を実施したところ、淡褐色細砂の下層から、遺物を若干包含する土層を確認した。この土層は水田土壤の可能性があり、平・断面を詳細に観察したが、畦畔等は確認できなかった。また遺物についても、断ち割り調査の際に出土した土器の細片のみで時期については明確でない。しかし同層を除去し、淡黄灰褐色細砂面を精査した際に、葦等の植物の根の痕跡が無数に見つかっており、低湿地状の地形の中でこの層が堆積したと推定される。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期末の溝、土坑、ピット等を検出した。昨年度に行われた東隣の調査では、当該時期の遺物、遺構は確認されておらず、新たな知見であるといえる。また掘立柱建物址としてのまとまりは確認できなかつたが、柱痕を持つピットが発見されたことから、古墳時代後期末の三番町遺跡の居住地が、当調査地付近に広がっていたことが明らかになったといえよう。

19. 上沢遺跡

1. はじめに

上沢遺跡は、神戸市長田区六番町1丁目から七番町1丁目に所在し、新湊川中流左岸扇状地に位置する（標高約16～20m）。現地形は、南に向かってやや急激に傾斜している。

また当遺跡は、室内遺跡の南西300mに位置する。室内遺跡は、伝房王寺跡との関連が考えられている遺跡であり、昭和53年度に室内小学校のプール建設にともなう発掘調査によって平安時代の瓦が出土している。

当遺跡は、房王寺線拡幅工事に伴い、上記の経緯をもとに、伝房王寺跡との関連から昭和63年度に試掘調査を行い、発見された。

発掘調査は、諸般の事情により数回にわけて実施することとなった。

I 区北半部と II 区第1造構面は、平成元年8月1日～8月31日の期間で、神戸市スポーツ教育公社が調査を担当し、その他の部分については平成元年3月13日～10月24日の間で神戸市教育委員会が調査を行った。

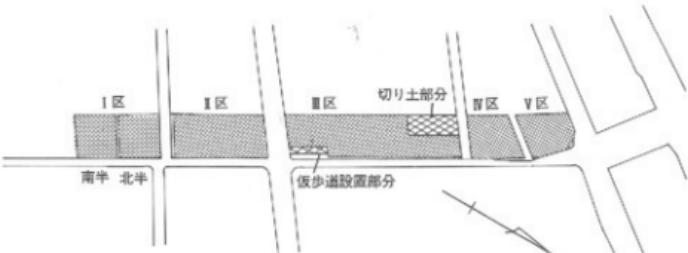


fig.223 調査地位置図 S = 1 : 5000

2. 調査の概要

今回の調査地では、試掘調査及び周辺部の遺跡等から弥生時代後期及び中世の遺構・遺物の検出が予測された。また周辺部は神戸市域でも特に縄文時代晚期から弥生時代前期の遺跡の集中している地域となっており、この調査でも縄文時代晚期から弥生時代前期の遺構・遺物が検出される可能性を含んでいた。

fig.224
調査地
地区割図
S=1:1500



(1) I 区北半

I区第1遺構面 層序

この調査区内では I・区北半の北西隅で暗黒褐色シルト層（古墳時代）が認められたほか、その上層などに部分的に灰色シルト層（中世）が存在する。他の部分では盛土直下に遺構面が存在する。

今回の調査において、自然流路・ピット83基・溝3条を検出した。

自然流路

I区の中央をほぼ南北に走る自然流路である。流路はおよそ2ないし3回の堆積で埋没しており、上層・中層・下層のそれぞれの層において弥生時代前期・縄文時代晚期の土器が出土している。

S X 01

II区北東隅で検出した浅い落ち込みである。形状・規模等は調査区外に出るため不明である。出土遺物としては弥生土器がある。

S X 02

I区北半の南側で幅0.3~1.1m、深さ0.1~0.2mを測る、二股に分かれれる溝状の落ち込みを検出した。この遺構は I区南半で検出した S X 02に続くものと思われる。出土遺物としては壺・甕・高杯があり、これらは、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけてのものと思われるが、I区南半の調査で検出した S X 02から須恵器などが出土しており、遺構の時期としては、古墳時代後期と考えられる。

ピット

ピットは I区北半・II区あわせて83基検出した。規模は直径0.1~0.4m、深さ0.1~0.4mを測る。時期等は、不明なものが多いため、おおよそ古墳時代と中世のものがほとんどであり、一部に弥生時代後期と思われるピットも若干存在する。

S P 11は一辺0.4m、深さ0.3mを測る方形のもので、底に石が敷き詰められており、根石と考えられる。

今回は数多くのピットを検出したが、相互の関連性を示しえず、建物等の構造は復元できなかった。

S D 01 幅1.3m、深さ0.1~0.4mを測る溝である。堆積土は灰色シルトで、出土遺物としては須恵器・土師器がある。時期は中世と思われる。

S D 02 幅1.0~1.8m、深さ0.1~0.4mを測る溝である。堆積土は灰色シルトで、出土遺物としては須恵器・土師器のほか陶磁器も出土している。時期は、近世に属するものと思われる。

(2) I 区南半 南北約8.5m×東西約9.5mの調査区で、今回の調査地のうち最も南に位置する。

現地表下0.5~1.0mで、土坑3基、落ち込み1基などを検出した。遺構面は全面的に搅乱を受けているが、特に調査区北隅付近は著しい削平を受けており、遺物包含層も失われていた。

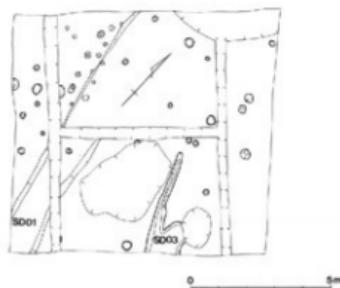
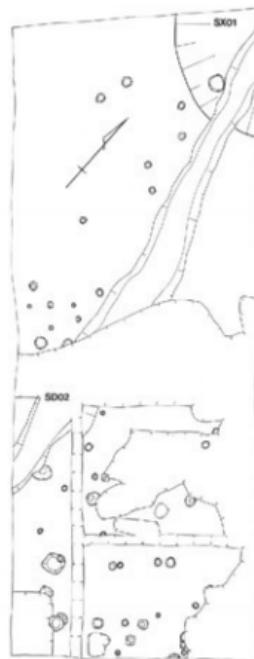
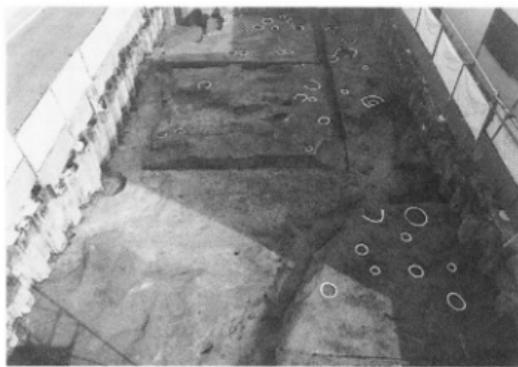


fig.225 I 区北半第1遺構面遺構配置図



S X01

調査区のほぼ中央で検出した平面形が不整梢円形の落ち込みで、長径3.4m、短径2.5m、深さ40~60cmのものである。

出土遺物は、5世紀後半の須恵器壺蓋・壺身・高坏の他、土師器甕、弥生土器などである。



fig. 228 I 区北半 S D02出土土器



fig. 229 I 区南半全景（北から）



fig. 230 I 区南半遺構平面図

- 1. 砂土
- 2. 雲母色砂質土 (遺物包含層)
- 3. 黑褐色砂質土
- 4. 雲母褐褐色砂質土
- 5. 雲母褐色砂質土
- 6. 雲母色砂質土
- 7. 淡褐色砂質土

S X02

調査区の北東中央で検出した遺構で、西部が調査区外に延びており、詳細は不明であったが、当初は平面形が楕円形の土坑と思われた。1区北半の調査では、このS X02と同一のものと考えられる遺構が検出されており、全体の平面形が二股に別れる溝状の落ち込みの一部と考えられる。規模は、1区南半調査区内で、径1.6×1.3m以上、深さ60~70cmである。

出土遺物は、6世紀前半の須恵器壺身・壺の他、土師器高环・壺・瓶把手、弥生土器などである。

SK01

調査区の東壁中央で検出した土坑であるが、北部が調査区外に延びており、詳細は不明である。規模は径70×30cm以上、深さ10cmである。出土遺物は、弥生時代後期の壺・壺・高环・鉢などである。

(3) III区切土

部分

調査前のIII区は北西部に段差があり、土止め作業実施のための重機の搬入が困難であった。そのため、まず調査区北西部において、段差部分を標高約19.10mまで掘り下げる調査を実施し、土止め作業が完了した後、全面調査を実施することとなった。

調査の結果、調査区の北西隅で遺物包含層を確認し、平安時代～鎌倉時代の須恵器壺・壺・壺、土師器壺・小皿などが出土した。

(4) III区仮歩

道部分

道設置するための小規模調査であり、作業の円滑化を図るために重機により盛土を除去した後、遺物包含層の掘削と遺構検出作業を行った。その結果、土坑1基、ピット2基のほか、調査区の南端部において自然流路の肩部付近を検出した。また、調査区の北端部においてもトレンチ東側の埠面観察により砂礫層の流路が確認されたが、搅乱のため平面的に流路の肩部を検出することはできなかった。

SK01

SK01は、長径1.2m、短径37cm、深さ10cmで、平面形が楕円形の土坑であり、埋土には拳大から人頭大の礫を含んでいた。遺物は出土していない。

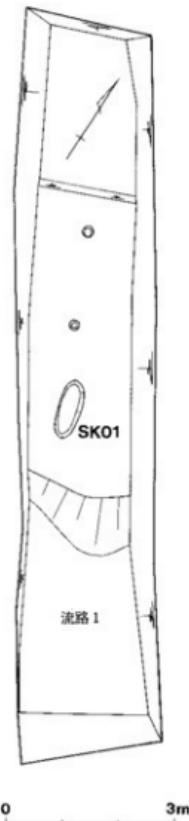


fig. 231

III区假歩道部分平面図

流路 1

調査区の南端において、包含層を除去した段階で、流路の肩を検出した。反対側の肩は調査区外に延びており、流路の方向及び規模は不明であるが、調査区内での最大の深さは1.12mである。

流路内からは、磨滅した弥生時代前期の甕の口縁部1点と弥生土器片数十点が出土している。

なお、この流路は、この後に実施した全面調査で確認した流路1の一部と考えられる。

(5) II 区下層

調査区のほぼ全域がI区北半の調査区で確認されている自然流路に当たり、後述するIII区の流路1とも同一のものと考えられる。

調査区が限られていたため、流路の幅については明確にできないが、最大の深さは約3.5mである。

基本層序は、第1遺構面の基盤層を形成する褐色シルト質細砂～中砂の下層に、自然流路を最終段階に埋没させた背灰色極細砂質シルトが1m前後の厚さで堆積し、さらに下層には約2mを測る灰色砂疊が厚く堆積している。また、流路底面も灰色砂疊で構成されるが、この層からの出土遺物は確認できなかった。

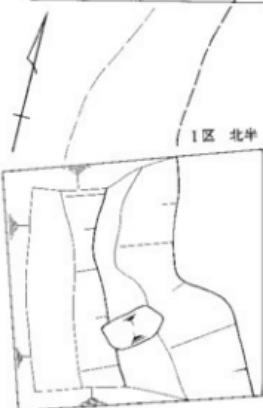
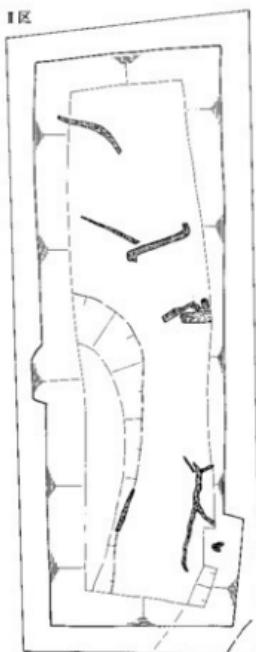


fig.232
I区北半・II区下層流路



下層の灰色砂疊層内には、最大長4mを測る自然木や種子などの自然遺物が若干包含されている。また、北西隅の流路中央にあたる暗褐色シルト質細砂層から樹木の根の部分が集中して検出された。

このような堆積状況からみると、この流路は大きな洪水によって運ばれた灰色砂疊によってその大半が埋没した後、徐々に青灰色極細砂質シルトによって埋め尽くされていったものと考えられる。

なお、流路内で検出した木は、樹種鑑定の結果、コナラ属アカガシ亞属、コナラ属コナラ節、ヤマザクラ、ヤマグワ、マキ属、イヌガヤであった。

出土遺物 この流路埋土から出土した土器の大半は、流路上層の青灰色極細砂質シルトからのもので、縄文土器と弥生土器がある。

縄文土器は、いずれも突帯紋のあるもので、長原式併行期のものである。弥生土器は、畿内第Ⅰ様式古段階のものである。

(6) Ⅲ区 幅約10m、長さ約43mの調査区で、Ⅱ区と道を隔てた山側にあたり、北西から南東への傾斜が著しい。便宜的に南側より4m毎に小地区を設定し、調査を実施した。

調査区の全域で遺構面を2面確認したが、一部3面の部分もあった。遺構面が3面存在した部分は9~11-W区で、第1遺構面の上層で古墳時代末の遺構面を確認した。土坑1基、ピット1基、落ち込み2基などの遺構を検出した。第1遺構面は弥生時代後期と古墳時代後期を中心とする遺構が多く、第2遺構面では縄文時代後期から弥生時代前期初頭の遺構が確認できた。

第1遺構面の遺構には、土坑5基、ピット20基、溝状遺構1条、不整形の落ち込み2基などがあり、淡褐色の砂疊が基盤層となっている。



fig.233

Ⅲ区北半全景（南から）

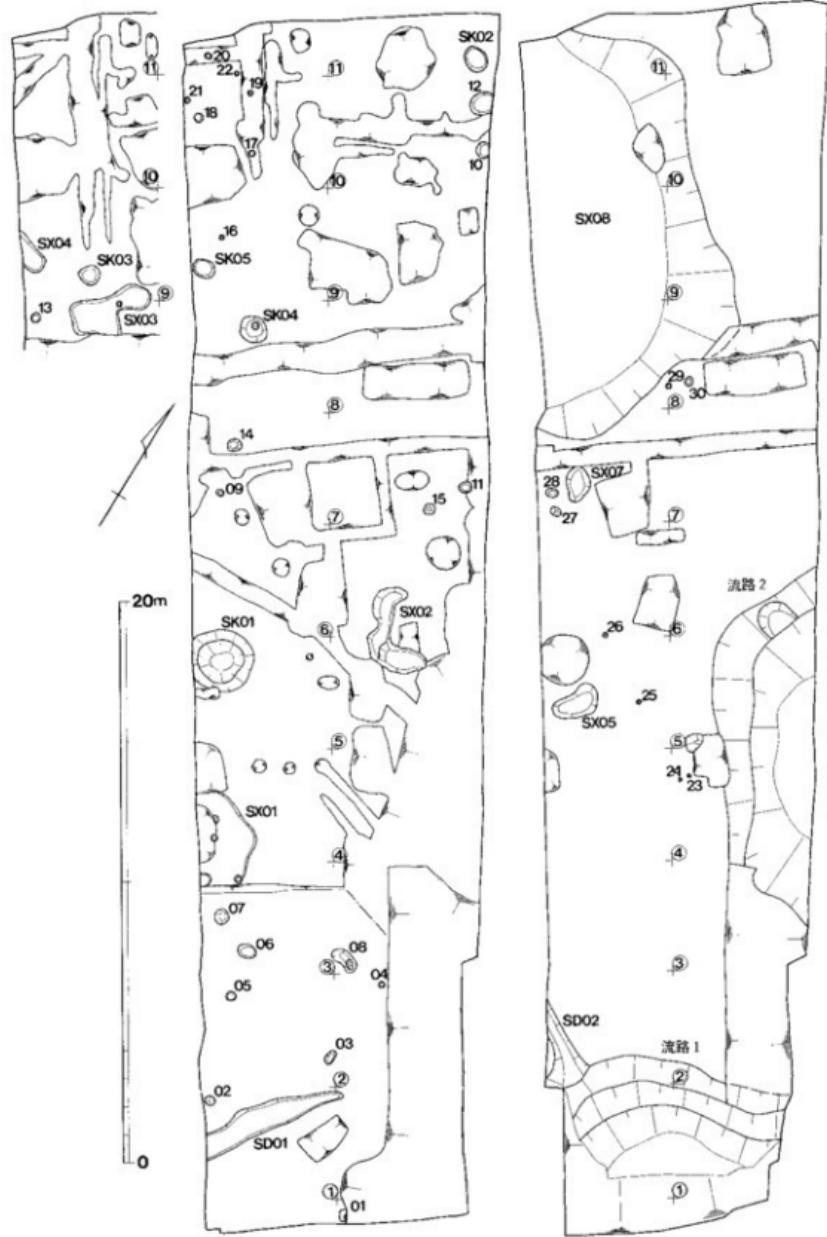


fig.234 Ⅲ区第1・第2透構面平面図

SK01

5・6-W区で確認した断面形が捕鉢状の土坑で、規模は直径2.2m、深さ1.5mである。埋土は5層に分けられ、第2層を除くそれぞれの層にまとまって弥生土器が確認できた。

各層毎の状況は、最下層の第5層（黒灰色シルト質細砂）では壺の口縁部が投げ込まれたような状態であり、第4層（褐色シルト質細砂～中砂）でも人頭大の礫とともに壺・甕などがまとまって投げ込まれたような状況で出土した。第3層（暗褐色細砂質シルト）は完形品を含むものの、概して小片が多く、出土土器量は第4層とともに多い。第2層（暗乳褐色シルト質極細砂）はほとんど土器は包含されず、第1層（暗褐色シルト質細砂～中砂）では、甕・高坏などがかたまって出土した。出土した弥生土器には壺・甕・鉢・高坏などの器種があり、当該期の器種がほぼ揃っている。また、概略的には、各層で時期的なまとまりをもち、下層から順に弥生時代後期のうちに収まるものと考えられる。しかし、なかには上層と下層で別々に検出した土器との破片が同一個体に復元されるものもみられ、さらに検討を加える必要がある。

出土遺物

第1遺構面に伴う出土遺物の大半は、上述したSK01の弥生土器である。この他の遺物としては、遺構に伴う若干の弥生土器、土師器、須恵器と包含層より検出した半月形外湾刃形態の磨製石庖丁片がある。後者は、2/3個体程度を欠損するものの、時期的には弥生時代前期まで遡る遺物と考えられる。



fig.235 Ⅲ区第1遺構面全景（南から）



fig.236 Ⅲ区第1遺構面 SK01第4層土器出土状況（北から）

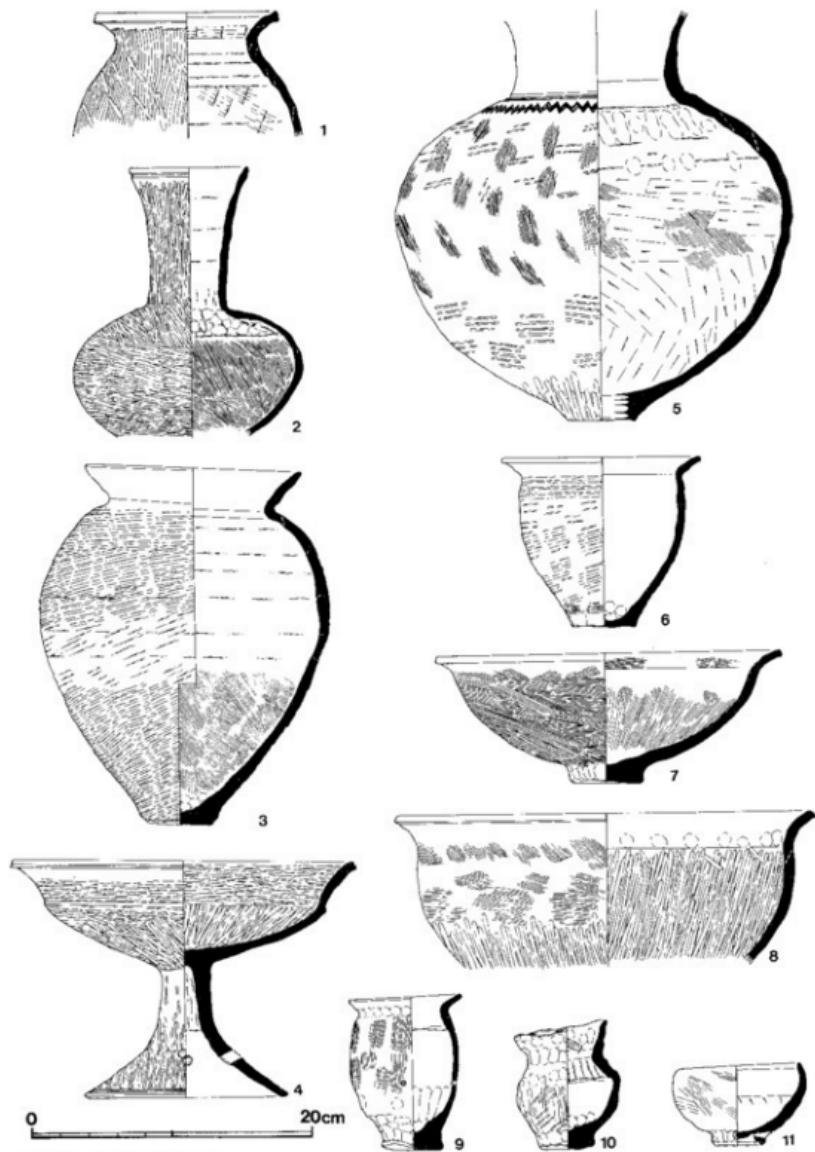


fig. 237 Ⅲ区SK01出土土器

第2遺構面 第2遺構面は、第1遺構面を形成した褐色砂礫と乳黄色シルト質極細砂（土壤化）の下層にある黄色シルト質極細砂上面が基盤層となっている。流路2条・溝状遺構1条・落ち込み4基・ピット8基などを確認した。

流路1 流路1はI区で確認した遺構で、I区・II区で確認されたものと層位などから同一のものと考えられる。調査区内での最大幅約6m、最大深さ約2.5mである。出土遺物は弥生土器の小片を肩部で若干検出できたにとどまり、II区で確認された青灰色極細砂質シルト層は流路中央の窪みにのみ堆積したものと推定できる。

流路2 流路2は3~6-E区で確認した遺構で、この大半は調査区外へ延びているものと考えられる。平面形態では円弧を描いており、その最大幅約3.5m、最大深さ約2.5mを測る。埋土は灰色系ないしは褐色系のシルト質細砂を中心としており、徐々に埋没していったものと考えられる。最下層では縄文時代後期の土器、上層では縄文時代晩期末~弥生時代前期前半の土器をそれぞれ包含している。

S X 08 S X 08は7~11区で確認した落ち込み状の遺構で、推定直径約15mを測る円形に近い平面形態の落ち込みで、この西半分は調査区外に延びている。最大深さは約1.5mを測る。出土遺物は全く確認できなかったため、性格や時期については不明である。

出土遺物 出土遺物は流路2のものが大半を占める。なかでも、縄文時代後期の北白川上層式に比定できる土器の出土は、当該期の遺跡の広がりを考えるうえで重要である。

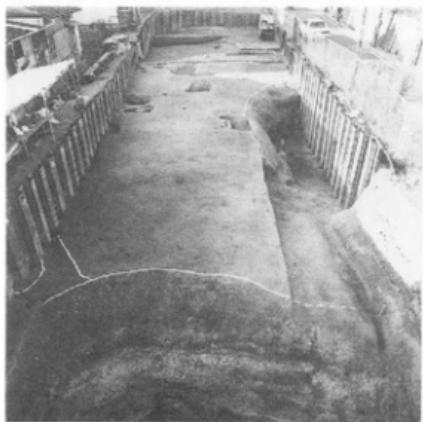


fig.238 II区第2遺構面全景（南から）



fig.239 II区第2遺構面流路1全景（西から）

(7) IV 区

IV区は、III区の北側に設定した調査区で、III区北端・IV区南端間の距離は、約3.5mである。地形に沿って北から南へ緩やかに傾斜している。

IV区では、2面の遺構面を確認した。なお、IV区内においても小地区を設定し、遺物の取り上げ等の便宜を図った。

第1遺構面

標高19.4~19.6mで確認した黄色シルト質極細砂層上面が遺構面の基盤層である。調査区内のほぼ中央で北東から南西方向にかけて大きく搅乱を受けている他、数ヶ所搅乱を受けている。

第1遺構面では、溝1条、落ち込み1基、ピット5基を検出した。

SD01

2区で検出した溝で、平面形は円弧状を呈して東西方向に流れ、東・西両側はともに調査区外に延びている。また、調査区中央部の搅乱によって東・西2つに分断されている。

規模は、幅18~38cm、深さ29~45cmである。平面形が円弧状をしているため、当初は住居址の周壁溝である可能性も考えられた。しかし、円弧の径がかなり大きくなること（推定内部径約22.5m）、住居内部にあたる溝の南側に主柱穴などが検出されなかったことなどから、現段階では、その可能性は低い。

遺物は、西端部と中央搅乱の両側の計3ヶ所で完形品に近い土器が出土している。いずれも弥生時代後期の土器で、甕2点、壺1点、高杯1点であり、ほぼ正位置で検出したことから、本来意図的に置かれていた可能性がある。また、甕・高杯は円錐・角錐と重なって出土しており、両者の関連が注目される。また、土器の出土状況から判断して、中央の搅乱に削平された部分にも本来完形に近い土器が存在した可能性が高いと考えられる。



fig.240 IV区第1遺構面平面図

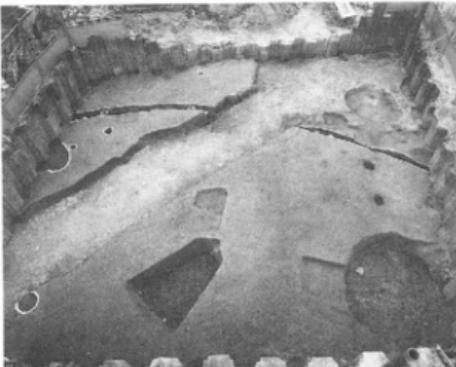


fig.241 IV区第1遺構面全景（南から）

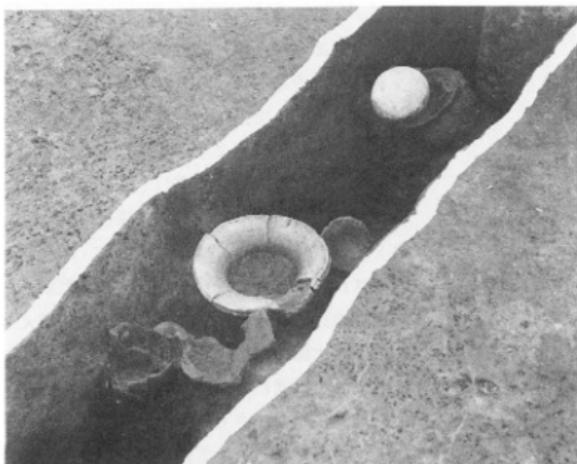


fig. 242

W区 第1遺構面
SD01土器出土状況

S X01 1・2-W区で検出した落ち込みで、東側が調査区外に延びているため詳細な規模は不明だが、平面形が楕円形のものと思われる。埋土は褐色シルト質細砂で、規模は幅約70cm、深さ約10cmである。遺物は出土しなかった。

ピット ピットは、計5基検出した。S P03～05はほぼ同規模で、直径15～25cm、深さ10～20cmで、埋土は黒褐色シルト質細砂である。S P01・02は他の3基に比べてやや大きめで、埋土も異なる。S P01は直径約35cm、深さ約16cmで、埋土は黒色シルト質細砂である。S P02は、直径約42cm、深さ約10cmで、埋土は灰褐色シルト質細砂である。

遺物は、S P03・04から弥生土器が若干出土している。いずれも小片であり、詳細な時期は不明であるが、SD01出土遺物と同時期のものと思われる。

第2遺構面 標高19.1～19.4mで確認した、黄色シルト質細砂層上面を基盤層とする遺構面である。

第2遺構面では、土坑1基、ピット5基を検出した。

S K01 1-W区で検出した土坑で、幅約56cm、深さ約12cmである。東部が攪乱を受けているため、詳細な規模は不明であるが、平面形が楕円形のものと思われる。なお、SK01の内部で直径約14cm、深さ約5cmのピット1基を検出した。遺物は出土していない。

ピット

ピットは、計5基検出した。直径10~30cm、深さ5~30cmのほぼ同規模のものであるが、SP09は他よりやや大きめである。埋土は、概ね褐色シルト質細砂であるが、SP10は淡褐色シルト質細砂である。

遺物は、全く出土していない。

なお、第2遺構面より下層の状況を確認するために、2区-Wにおいて中央攪乱内に試掘坑を設定して掘削した。調査の結果、第2遺構面下約15~70cmで乳褐色及び暗灰色の砂疊層を検出し、さらに下層には極細砂層が第2遺構面下約1.5mまで堆積していた。下層からは、遺構・遺物とともに検出されなかった。後述するV区の試掘調査結果と考えあわせても、下層に遺構の存在する可能性は非常に低いと考えられる。

(8) V区

調査開始前に試掘調査が実施されていなかったため、土止め矢板工事が施工される以前に重機による試掘調査を実施した。現地表下35~50cmで乳色細砂を検出し、さらに下層を調査したが砂疊層が約2mまで続いており、III・IV区まで確認できる遺物包含層や遺構面は全く確認できなかった。

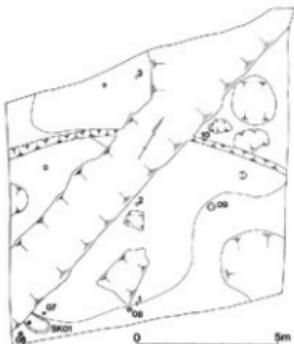


fig.243 N区第2遺構面平面図

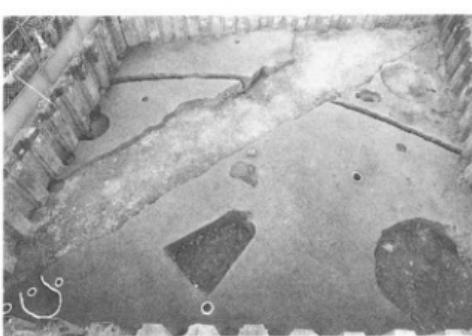


fig.244 N区第2遺構面全景 (南から)

fig.245

V区試掘坑断面 (南から)



3. まとめ

I 区北半と

II 区第1遺
構面の調査

I 区北半と II 区第1遺構面の調査において、自然流路1条・ピット83基・溝3条を検出した。なかでも縄文時代晚期から弥生時代前期の流路の検出は大きな成果といえよう。流路内の出土遺物は層序の上では混在しており、流路内における弥生前期・縄文晚期の単純層は存在しない。

上層（第3層）には、縄文時代晚期の土器は存在するものの量的にも少なく細片であり、弥生土器が多くを占めている。上層の全体の傾向としては遺物の出土量が中層・下層と比べて少なく、若干の摩耗がみとめられることからも、2次的な混入も考慮する必要があるようである。しかしながら、弥生土器は削り出し突帯が認められるだけで、貼り付け突帯は認められないものであり、上層は弥生時代前期後半を下限と考えられる。

中層（第4～6層）からも縄文時代晚期の土器や弥生時代前期の土器が出土している。縄文時代晚期の土器は長原式に比定しうるもので、胸部及び口唇部やや下に突帯を持つものである。突帯に刻みを付けるものと付けてないものがあり、ほぼ同数ぐらい存在する。これらのほかに口唇部に突帯をもつものもある。器種としては、縄文土器：鉢、弥生土器：壺・甕がある。中層からは縄文土器と弥生土器が概ね同数出土している。

下層（第7～9層）からも縄文時代晚期の土器や弥生時代前期の土器が出土している。ここからも削り出し突帯を持つ土器が出土しているが、数点のみである。ここからは弥生時代前期前葉の土器が多く出土しており、縄文時代晚期の土器も個体がやや大きめで、完形を含むようになる。器種としては、縄文土器：壺・鉢、弥生土器：壺・甕・鉢がある。

全体としては縄文土器の長原式のものと弥生土器の畿内第I様式中段階のものが共伴しており、上層より下層の方が若干古い傾向を示しているものの短期間のうちに埋没した流路内の一括遺物と考えられる。さらに、各層位内における遺物の出土状況からも遠賀川系土器と縄文系土器は混在しており、それぞれに一括投棄されたような状態ではない。遺構が流路という性格上、遺物の取り扱いには慎重を期さねばならないが、遠賀川系土器と縄文系土器との共伴に関しては認められるだろう。最近各地で同様な傾向が認められており、弥生時代前期の土器と長原式は共伴することはほぼ確定的となってきている。しかし、その共伴するものが弥生土器の第I様式中段階まで下がりうるかどうかでは若干の意見の相違がみられ、確定的ではない。その意味において、今回の例は流路という遺構の性格上、決定的な実例とするには困難ではあるが、神戸市域における突帯文系土器が弥生土器の畿内第I様式中段階と共伴する可能性は指摘しうるであろう。

これらに関しては、今後さらに遠賀川系土器と縄文系土器を中心周

辺部の調査成果も含めて考えていかねばならない課題である。

農耕の開始と遠賀川系土器とは密接な関係をもっており、上沢遺跡においてもその可能性が示唆されるところであるが、プラントオパールの分析によると調査区内で農耕が行われていた可能性は低いようである。

弥生時代後期及び古墳時代・中世の遺構等についてはその性格を明確にはし得なかった。ただし、遺物包含層からではあるが平安時代頃の瓦が出土しており、伝房王寺跡との関連からも今後注意が必要である。

I, II, IV, V区　この調査では、III区の第1遺構面で確認したSK01や、II区・III区で確認した縄文時代後期・晩期の遺物を含む2条の流路など注目すべき遺構を検出した。

III区のSK01では、弥生時代後期の土器を多量に検出した。埋土各層の状況は前述した通りだが、まとまった数が出土しており、当該期の良好な資料となりうるものと考えており、土器については今後さらに検討を加えるつもりである。また、遺構の性格については、現段階では、井戸などの用途を考えているが、確定するには到っていない。さらに、調査区内においては、この遺構と直接の関連をもつ集落跡が確認されておらず、当該期の集落跡は、調査区の西側に存在する可能性が考えられる。

流路1については、II区の下層において相当数の縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が出土した。III区内では、少量の土器しか出土していないが、縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が共伴して出土しており、注目される。土器の出土状況をみると、上層より下層のほうが若干古い傾向が認められるが、縄文時代晩期・弥生時代前期の単純層は存在しない。流路という性格から早計な断定はできないが、縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が共伴する事例は各地で確認されており、神戸市域における当該期の様相を考えるうえで貴重な資料であるといえる。

流路2では、縄文時代晩期や弥生時代前期の土器に加えて縄文後期の土器が出土している。前述の流路1では縄文時代後期の土器は出土しておらず、現段階では、2つの流路は別のものと考えている。

20. 大開遺跡

1. はじめに

大開遺跡は、神戸市兵庫区大開通4丁目に位置している。発掘調査は、小学校の新築にともない、昭和63年8月から約3500m²を対象にして実施した。遺跡は、六甲山南麓の現標高約4mの沖積地に立地している。東側はかつて旧湊川が南流していた地点である。

2. 調査の概要

これまでの調査において、大開遺跡は縄文時代後期から近世までの遺物が確認されているが、遺構面として確認されたのは、江戸時代後半（第1遺構面）・平安時代後半から室町時代（第2遺構面）・弥生時代前期（第3遺構面）・縄文時代晚期（第4遺構面）の4遺構面である。

第1遺構面では、ピットが検出されている。第2遺構面では、平安時代末の井戸1基・室町時代の堀状遺構・溝状遺構多数などが検出されている。

第3遺構面が、大開遺跡で最も注目される弥生時代前期の遺構面である。検出された遺構には、竪穴住居址5棟・貯蔵穴11基（可能性の考えられるもの2基を含む）・土坑多数・溝状遺構数条、ピット多数などがある。

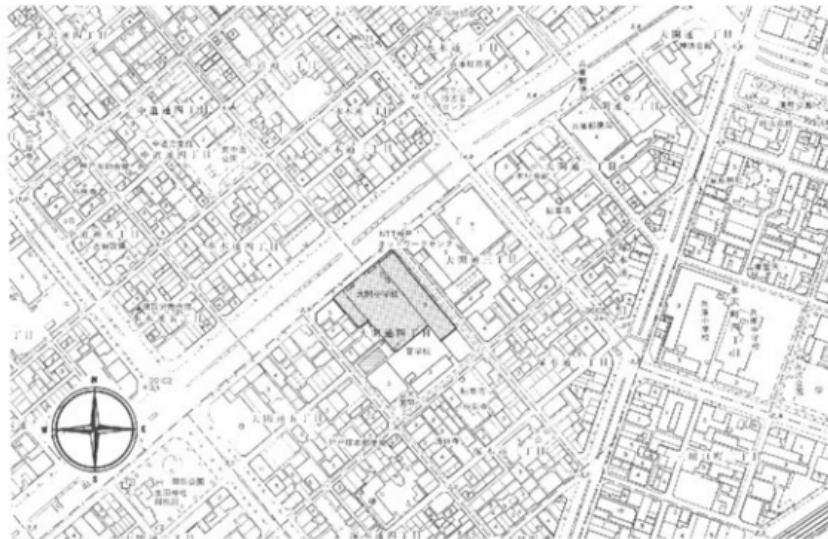


fig. 246 調査地位置図 S = 1 : 5000

環濠

遺構として最も注目されるものは、東西70m×南北40mに復元することが可能な環濠の確認である。環濠は幅1.5~2mで、深さは0.8~1mを測る。断面形態は、ほぼV字形をとるが、部分的には逆台形を呈している。後世の削平を受けているとはいって、九州地方で見られるような幅5~6mにも及ぶような環濠には復元是不可能である。埋土からは、相当量の遺物が出土している。これらの前期の遺物に伴う形で、突帯文土器が出土している。一部ふるいにかけた土の中からは、炭化米なども見つかっている。土星や陸橋部などは確認されなかった。

S D 410は環濠にとりつく溝で、プラン図からみると本来この溝が初期の環濠でのちに東側に環濠を拡張した可能性が考えられる。

竪穴住居址

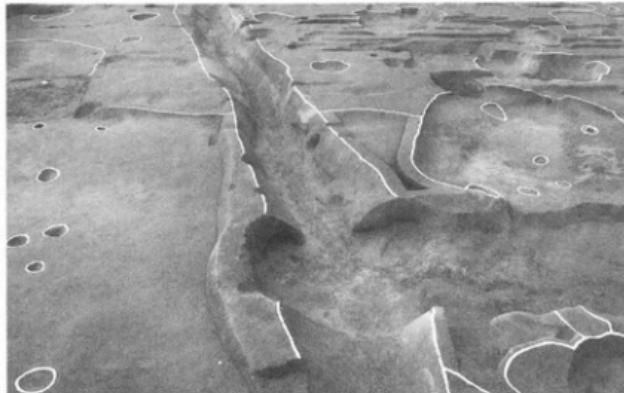
竪穴住居址は環濠内で4棟、環濠外で1棟が検出されている。プランは、円形・不整円形である。

S B 401は、長径6.8m、短径5.5mを測る。深さは、10cmほどしか残存しておらず、中世段階に相当の削平を受けていた。ピットは、10数ヵ所確認されている。中央付近には、炭を含む土坑が2基とピットが確認された。この中央土坑には、前期の土器片に混じって突帯文土器の口縁部が出土している。遺物は、床面において確認され、土器片多数のほかにサヌカイトの剝片なども数多く出土している。また、結晶片岩製の石棒も出土している。

S B 402は、直径約5mの円形の住居址である。柱穴は、明確なものは確認されなかった。しかし、中央土坑が確認され、埋土には炭片が多量に含まれていた。

S B 404は、直径約5mの不整円形の住居址である。埋土には、多量の

fig. 247
環濠完掘状況
(東から)



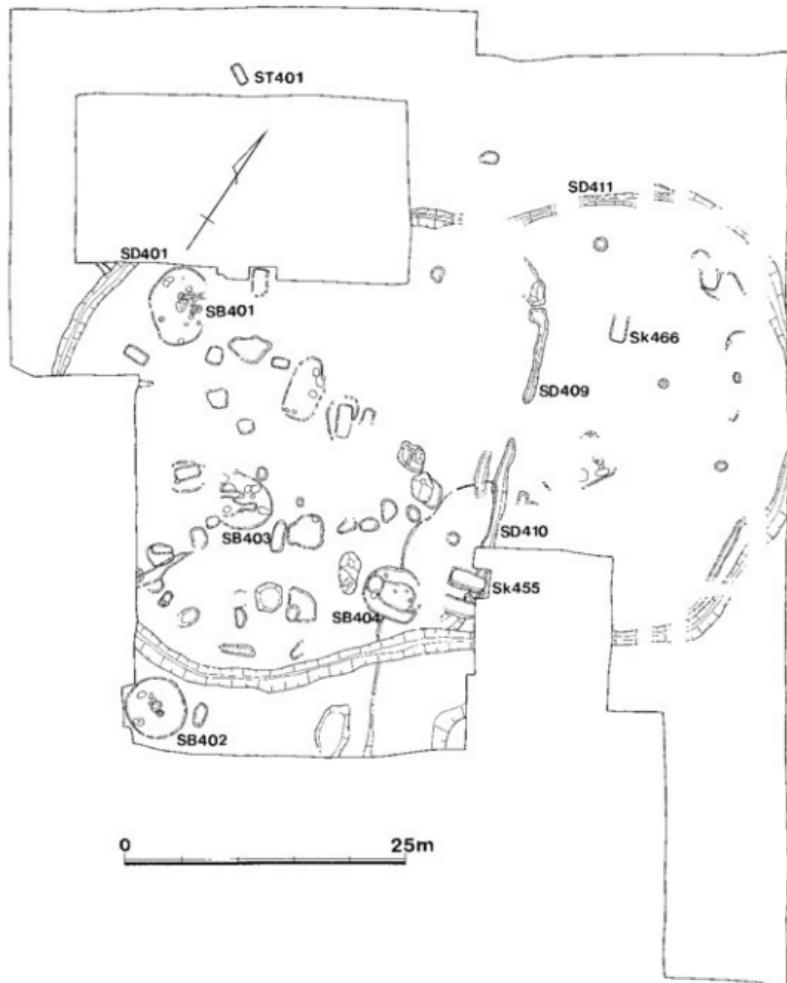


fig.248 遺構配置図

遺物が含まれ、突帯文土器や木葉文土器などが見られる。

貯蔵穴 貯蔵穴は11基（可能性の考えられるもの2基を含む）が確認された。プランは、長方形貯蔵穴が8基、方形貯蔵穴が3基である。長方形貯蔵穴は、短辺1~1.5m、長辺2~3mを測る。方形貯蔵穴は、1辺1.5mほどで、